

# 美しい村

堀辰雄

青空文庫



天の瀬氣こうきの薄うす明あかりに優やさしく会え積しやくをしようとして、  
命の脈またが又また新しく活かつ澆ばつに打うっている。

こら。下界げがい。お前はゆうべも職むなを曠なうしなかつた。

そしてけさ疲つかが直なつて、己おれの足あしの下したで息いきをしている。  
もう快樂もつを以もつて己おれを取り巻まきはじめる。

断たえず最高たの存在たへと志しざして、  
力ちから強い決心けつしんを働はたらかせているなあ。

ファイブ  
部

## 序曲

六月十日 K：村にて

御無沙汰ごぶさたをいたしました。今月の初めから僕ぼくは当地たいざいに滞在たいざいしております。前からよく僕は、こんな初夏に、一度、この高原の村に来てみたいものだと言っていましたが、やっと今度、その宿望わけがかなった訣わけです。まだ誰だれも来ていないので、淋さびしいことはそりあ淋しいけれど、毎日、気持のよい朝夕を送っています。

しかし淋しいとは言っても、三年前でしたか、僕が病氣をして十月ごろまでずっと一人で滞在していたことがありましたね、あ

の時のような山の中の秋ぐちの淋しきとはまるで違ちがうように思えます。あのときは籐とうのステッキにすぎるようにして、宿屋の裏の山やまみち径などへ散歩に行くと、一日毎ごとに、そこいらを埋うずめている落葉の量が増える一方で、それらの落葉の間からはときどき無気味な色をした茸きのこがちらりと覗のぞいていたり、或あるいはその上を赤腹（あんなんだか人を莫ば迦かにしたような小鳥です）なんぞがいかにも横着そうに飛びまわっているきりで、ほとんど人ひと気けは無ないのですが、それでいて何だかそこら中に、人々の立去あつた跡あとにいつまでも漂ただよっている一種のにおいのようなもの、——ことにその年の夏がいきわ花やかで美しかっただけ、それだけその季節の過ぎてからの何とも言えぬ佗わびしきしのようなものが、いわば凋ちよう落らくの感じの

ようなものが、僕自身が病後だったせいか、一層ひしひしと感じられてならなかったのですが、（——もつとも西洋人はまだかなり残っていたようです。ごく稀まれにそんな山径で行き逢あいますと、なんだか病やみ上がりの僕の方を胡散うさんくさそうに見て通り過ぎましたが、それは僕に人なつかしい思いをさせるよりも、かえってへんな佻たうびしさをつのらせました……）——そんな佻たうびしさがこの六月の高原にはまるで無いことが何よりも僕は好きです。どんな人気のない山径を歩いていても、一草一木ことごとく生き生きとして、もうすっかり夏の用意ができ、その季節の来るのを待つているばかりだと言った感じがみなぎっています。山やま鶯うぐいすだの、閑古鳥かんこどりだのの元気よく囀さえずることといったら！ すこし僕は考え

ごとがあるんだから黙だまつていてくれないかなあ、と癩かんしやく癩やくを起したくなる位です。

西洋人はもうぽつぽつと来ているようですが、まだ別荘などは大概たいがいとぎ閉とぎされています。その閉とぎされているのをいいことにして、それにすこし山の上の方だと誰ひとりそこいらを通りすぎるものもないので、僕は氣に入った恰かつこう好こうの別荘があるのを見つけると、構かまわずその庭園の中へはいつて行って、そのヴェランダに腰こしを下くだろし、煙草たばこなどをふかしながら、ぼんやり二三時間考えごとをしたりします。たとえば、木の皮葺かわぶきのバンガロオ、雑草おの生おい茂しげった庭、藤ふじ棚だな（その花がいま丁度見事に咲さいています）のあ  
るヴェランダ、そこから一帯に見下ろせる櫛もみや落葉松からまつの林、その

林の向うに見えるアルプスの山々、そういったものを背景にして、一篇べんの小説を構想したりなんかしているんです。なかなか好い気持です。ただ、すこしぼんやりしていると、まだ生れたての小さな蚋ぶよが僕の足を襲おそったり、毛虫が僕の帽子ぼうしに落ちて来たりするの  
で閉口です。しかし、そういうものも僕には自然の僕に対する敵意のようなものとしては考えられません。むしろ自然が僕に対してうるさいほどの好意を持っているような気さえます。僕の足もとになど、よく小さな葉っぱが海苔卷のりまきのように巻かれたまま落ちていますが、そのなかには芋虫いもむしの幼虫が包まれているんだと思うと、ちよつとぞつとします。けれども、こんな海苔卷のようなものが夏になると、あの透とうめい明はねな翅はねをした蛾がになるのかと想像

すると、なんだか可愛らしい気もしないことはありません。

どこへ行つても野薔薇がまだ小さな硬い白い蕾をつけています。

その咲くのが待ち遠しくてなりません。これがこれから咲き乱れて、いいにおいをさせて、それからそれが散るころ、やつと避暑客たちが入り込んでくることでしょう。こういう夏場だけ人

の集まつてくる高原の、その季節に先立って花をさかせ、そしてその美しい花を誰にも見られずに散つて行つてしまふさまざまな花（たとえばこれから咲こうとする野薔薇もそうだし、どこへ行つても今を盛りさかに咲いている躑躅つづじもそうです）——そういう人ひと馴れない、いかにとなも野生の花らしい花を、これから僕ひとりきりで思う存分に愛玩あいがんしようという気持は（何故なぜなら村の人々はい

ま夏場の用意に忙しくて、そんな花などを見てはいただけませんか（ら）何ともいえずに爽やかで幸福です。どうぞ、都会にいたたまれないでこんな田舎暮らしをするようなことになっている僕を不幸だとばかりお考えなさらないで下さい。

あなた方は何時頃こちらへいらつしやいますか？ 僕はほとんど毎日のようにあなたの別荘の前を通ります。通りすぎりにちよつとお庭へはいつてあちらこちらを歩きまわることもあります。昔はあんなに草深かったのに、すっかり見ちがえる位、綺麗な芝生になってしまいましたね。それに白い柵などをおつくりになつたりして。……何んだかあなたの別荘のお庭へはいつても、まるで他の別荘の庭へはいつているような気がします。人に見つけら

れはしないかと、心臓がどきどきして来てなりません。どうしてこんな風にお変えになってしまったのか、本当におうらめしく思えます。ただ、あなたと其処そこでよくお話したところのあるヴェランダだけは、そっくり昔のままですけれど……

ああ、また、僕はなんだか悲しそうな様子をしてしまった。しかし、僕は本当はそんなに悲しくはないんですよ。だって僕は、あなた方さえ知らないような生の愉悦ゆえつを、こんな山の中で人知れず味あじわっているんですもの。でも一体、何時ごろあなた方はこちらへいらつしやるのかしら？ あなた方とはじめて知り合いになつたこの土地で、あなた方ともう見知らない人同志のように顔を合せたりするのは、大へんつらいから、僕はあなた方のいらつしや

る前に、この村を出発しようかと思ひます。どうぞその日の来るまで僕にも此処ここにいることを、そしてときどき誰も見ていないとき、あなたの別荘のお庭をぶらつくことをお許し下さい。

またしても、何と悲しそうな様子をするんだ！ もう、止よしませぬ。しかし、もうすこし書かせて下さい。でも、何を書いたもの

かしら？ 僕のいま起居しているのはこの宿屋の奥おくの離れはなです。御存知ごぞんじでしょう？ あそこを一人で占せんり領りょうしています。縁側えんがわ

から見上げると、丁度、母屋おもやの藤棚が真向うに見えます。さつきもいったように、その花がいま咲き切っているんです。が、もう盛りもすぎたと見え、今日あたりは、風もないのにぼたぼたと散りこぼれています。その花に群がる蜜蜂みつばちといったら大したもの

です。ぶんぶんぶん唸うなっています。この手紙を書きながら、ちよつと筆を休めて、何を書こうかなと思つて、その藤の花を見上げながらぼんやりしていると、なんだか自分の頭の中の混乱と、その蜜蜂のうなりとが、ごつちやになつて、そのぶんぶんいつているのが自分の頭の中ではないかしら、とそんな気がしてくる位です。僕の机の上には、マダム・ド・ラファイエットの「クレエヴ公こうしやく 爵夫人」が読みかけのまんま頁ページをひらいています。はじめてこのフランスの古い小説をしみじみ読んでいますが、そのお蔭かげでだいぶ僕も今日このごろの自分の妙みょうに切迫せつぱくした気持から救われてゐるような気がしています。この小説についてはあなたに一番その読後感をお書きしたいし、また黙つてもいたい。二三年

前、あなたに無理矢理にお読ませした、ラジイゲの「舞踏会」ぶとうかいは、この小説をお手本にしたと言われている位ですから、まあ、あれに大へん似ています。しかし「舞踏会」のときは、まだあんなにこだわらずに、その本をお貸しが出来たけれど、そしてそれをお読みになってもあなたは何もおつしやらなかつたし、僕もそれについては何もお訊ききしなかつたが、それでも或ある気持はお互たがいに通じ合っていたようでしたけれど、いま僕は、あの時のようにこだわらずに、この小説の読後感をあなたにお書きできるかしら？

第一、この手紙にしたって、筆をとりながら、果してあなたに出せるものやら、出せそうもないものやら、心の中では躊躇ためらつて

いるのです。恐らく出さずにしまいかも知れませんが……こんなことを考え出したら、もうこの手紙を書き続ける気がしなくなりました。もう筆を置きます。出すか出さないか分かりませんが、ともかくも左様なら。

## 美しい村

或は 小遁走曲  
フウグ

或る小高い丘おかの頂たかねにあるお天狗てんぐ様のところまで登のぼってみよう  
と思おもつて、私は、去年こぞの落葉らくえつですつかり地肌じはだの見みえないほど埋うま  
っているやや急いそな山やま径みちをガサガサと音おとさせながら上あつて行いつた  
が、だんだんその落葉らくえつの量りょうが増あして行いつて、私の靴くつがその中なかに気

味悪いくらい深く入るようになり、腐くさった葉の湿しめり気がその靴のなかまで滲しみ込んで来そうに思えたので、私はよつぽどそのまま引つ返そうかと思つた時分になつて、雑木林ぞうきばやしの中からその見棄みすてられた家が不意に私の目の前に立ち現れたのであつた。そうしてその窓がすっかり釘くぎづけになつていて、その庭なんでもすつかり荒あれ果て、いまにも壊こわれそうな木戸が半ば開かれたままになつているのを認めると、私は子供らしい好奇こうきしん心で一ぱいになりながらその庭の中へずかずかと這はい入つて行つた。

そうして一めんふに生い茂つた雑草を踏ふみ分けて行くうちに、この家のこうした光景は、数年前、最後にこれを見た時とそれが少しも變つていないような気がした。が、それが私の奇妙な錯覚さつかく

であることを、やがて私のうちに蘇よみがえつて来たその頃の記憶きおくが明めい瞭りょうにさせた。今はこんなにも雑草が生い茂ほとつて殆んど周囲の雑木林と区別がつかない位にまでなつてしまつてこの庭も、その頃は、もつと庭らしく小綺麗になつていたことを、漸ようやく私は思ひ出したのである。そうしてつい今しがたの私の奇妙な錯覚は、その時から既すでに経過してしまつた数年の間、若もしそれがそのままに打うち棄ちられてあつたならば、恐らくはこんな具合ぐあいにもなつているのであるに……という私の感じの方が、その当時の記憶が私に蘇るよりも先きに、私に到着したからにちがひなかつた。しかし、私のそういう性せつ急かちな印象が必ずしも贗にせではなかつたことを、まるでそれ自身裏書きでもするかのようによ、私のまわりには、この

庭を一面に掩おおうて草木が生い茂るがままに生い茂っているのであった。

そのヴェランダにはじめて立った私は、錯雑した樅もみの枝を透して、すぐ自分の眼下に、高原全帯が大きな円を描えがきながら、そしてここかしこに赤い屋根だの草屋根だのを散らばらせながら、横よこたわっているのを見下ろすことが出来た。そうしてその高原の尽つきるあたりから、又また、他のいくつもの丘が私に直面しながら緩ゆるやかに起伏きさくしていた。それらの丘のさらに向うには、遠くの中央アルプスらしい山脈が青空に幽かすかに爪つめでつけたような線を引いていた。そしてそれが私のきざきざな地平線をなしているのだった。

夏毎べごとにこの高原に来ていた数年前のこと、これと殆どそっくり

な眺望ちようぼうを楽しむために、私は屢しばしば、ここからもう少し上方にあ  
 るお天狗様まで登りに来たのだけれど、その度毎たびに、この最後の  
 家の前を通り過ぎながら、そこに毎夏のようにいつも同じ二人の  
 老嬢ろうじようが住まっているのを何んとなく気づかわしげに見やつて  
 は、その二人暮らしに私はひそかに心をそそられたものだった。  
 ——だが、あれはひよつとすると私自身の悲しみを通してばかり  
 見ていたせいかも知れないぞ？（と私は考えるのだった。）何故  
 つて、私がこの丘へ登りに来た時は、いつも私に何か悲しいこと  
 があつて、それを肉体の疲労ひろうと取り換かえたいためだったからな。  
 真白まっしろな名札なふだが立つて、それにはMISSのついた苗字みょうじが二つ書  
 いてあつたつけ。……そう、その一方が確かMISS SEYMOREと

いう名前だったのを私は今でも覚えてゐる。が、もう一方のは忘れた。そうしてその老嬢たちそのものも、その一方だけは、あの銀色の毛髪もうはつをして、何となく子供子供した顔をしていた方だけは、今でも私の眼にはつきりと浮うかんでくるけれど、もう一方のはどうしても思い出せない。昔から自分の氣に入った型タイプの人物にしか関心しようとしな<sup>し</sup>ない自分の習癖しゅうへきが、（この頃ではどうもそれが自分の作家としての大きな才能の欠陥けっかんのように思われてならないのだけれど、）この老嬢たちにも知らず識しらずの裡うちに働いていたものと見える。

……この数年間というもの、この高原、この私の少年時の幸福な思い出と言え<sup>ば</sup>その殆んど全部が此処ここに結びつけられているよ

うな高原から、私を引き離していた私の孤独こどくな病院生活、その間に起つたさまざま出来事、忘れがたい人々との心にもない別離べつり、その間の私の完全な無為むい。……そして、その長い間放擲ほうてきしていた私の仕事を再び取り上げるために、一人きりにはなりたいたし、そうかと言つてあんまり知らない田舎いなかへなぞ行つたら淋しくてしようがあるまいからと言つた、例の私の不決断な性しょうぶん分ぶんから、この土地ならそのすべてのものが私にさまざまな思い出を語ってくれるだろうし、そして今時分ならまだ誰にも知つた人には会わないだろうしと思つて、こんな季節はずれの六月の月を選んで、この高原へわざわざ私はやつて来たのであつた。が、数日前にこの土地へ到着してから私の見聞きする、あたかも私のそういう長

い不在を具象ぐしようするような、この高原に於おけるさまざまな思いがけない変化、それにつけても今更いまさらのように蘇すって来る、この土地ではじめて知り合いになった或る女友達との最近の悲しい別離。

……

そんな物思いに耽ふけりながら、私はぼんやり煙草たばこを吹かしたまま、ほとんど私の真正面の丘の上に聳そびえている、西洋人が「巨人きよじんの椅子いす」という綽名あだなをつけているところの大きな岩、それだけがあらゆる風化作用から逃のがれて昔からそっくりそのままに残っているかに見える、どっしりと落着いた岩を、いつまでも見まもつていた。

私はやがて再び枯葉かれはをガサガサと音させながら、山径を村の方

へと下りて行つた。その山径に沿うて、落葉松などの間にちらほらと見える幾つかのバンガロオも大概はまだ同じような紅殻板を釘づけにされたままだった。ときおり人夫等がその庭の中で草むしりをしていた。彼等の中には熊手を動かしていた手を休めて私の方を胡散臭そうに見送る者もあった。私はそういう氣づまりな視線から逃れるために何度も道もないようなところへ踏み込んだ。しかしそれは昔私の大好きだった水車場のほりを目ざして進んでいた私の方向をどうにかこうにか誤らせないでいた。しかし其処まで出ることは出られたが、数年前まで其処にごごとと音立てながら廻つていた古い水車はもう跡方もなくなつてた。それよりももつと悲しい氣持になつて私の見出したのは、そ

の水車場近くの落葉松を背にした一つのヴィラだった。私の屢し  
ば訪れたところのそのヴィラは、数年前に最後に私の見た時とは  
すつかり打つて変つていた。以前はただ小さな灌木の茂みで無  
雑作に縁どられていたその庭園は、今は白い柵できちんと区限ら  
れていた。私はふと何故だか分らずにその滑らかな柵をいじ  
くろうとして手をさし伸べたが、それにはちよつと触れただけで  
あつた。そのとき私の帽子の上になんだか雨滴のようなものがぼ  
たりと落ちて来たから。そこでその宙に浮いた手を私はそのまま  
帽子の上に乗って行つた。それは小さな桜の実であつた。私がひ  
よいと頭を持ち上げた途端に、そこには、丁度私の頭上に枝を大  
きく拈げながら、それがあんまり高いので却つて私に気づかれず

にいた、それだけが私にとっては昔馴染なしみの桜の老樹が見上げられた。

やがて向うの灌木の中から背の高い若い外国婦人が乳母車うばぐるまを押しながら私の方へ近づいて来るのを私は認めめた。私はちつともその人に見覚えがないように思った。私はその道ばたの大きな桜の木に身を寄せて道をあけていると、乳母車の中から亜麻色あまいろの毛髪をした女の児こが私の顔を見てにっこりとした。私もつい釣つり込まれて、にっこりとした。が、乳母車を押していたその若い母は私の方へは見向きもしないで、私の前を通り過ぎて行つた。それを見送っているうち、ふとその鋭すどどい横顔から何んだか自分も見たことがあるらしいその女の若い娘むすめだった頃の面影おもかげが透すかしのよ

うに浮んで来そうになった。

私はその白い柵のあるヴィラを離れた。私の帽子の上に不意に落ちて来た桜の実が私のうちに形づくり、拵げかけていた悲しい感情の波紋を、今しがたの気づまりな出会であいがすっかり掻かき乱してしまつたのを好い機会にして。

私は村はずれの宿屋に帰つて来た。私がその宿屋に滞たいざい在する度にいつも私にあてがわれる離れの一室。同じように黒くろずんだ壁かべ、同じような窓まど枠わく、その古い額がく縁ぶちの中にはいつて来る同じような庭、同じような植込み、……ただそれらの植込みに私の知つてゐる花や私の知らない花が簇むらがり咲さいているのが私には見馴みなれなかつた。それはそれでまた私を侘わびしがらせた。母屋おもやの藤ふじ柵だなか

ら、風の吹くごとに私のところまでその花の匂においがして来た。その藤棚の下では村の子供たちが輪になって遊んでいた。私はその子供たちの中に昔よく遊んでやったことのある宿屋の子供がいるのを認めた。そのうちに他ほかの子供たちは去った。そしてその子供だけがまだ地面に跣こきんだまま一人で何かして遊んでいた。私はその子の名前を呼んだ。その子はしかし私の方を振り向こうともしなかつた。それほど自分の遊びに夢むちゆう中ちゆうになっているように見えた。私がもう一度その名前を呼ぶと、やっとその子はうす汚よごれた顔を上げながら私に言った。「太郎ちゃんは何処どこにいるか知らないよ」——私はその時初めてその小さな子供は私の呼んだ男の子の弟であるのに気がついたのだ。しかし何という同じような顔、同じよ

うな眼差まなざし、同じような声。……暫しばらくしてから「次郎！ 次郎！」と呼びながら、一人の、ずっと大きな、見知らない男の子が庭へ這入はいって来るのを私は見た。ようやく私になついて私の方へ近づいて来そうになつたその小さな弟は、それを聞くと急いでその方へ駈かけて行つてしまつた。私の方では、その大きな見知らないような男の子が昔私と遊んだことのある子供であるのを漸やつと認め出していた。しかし、その生意気ざかりの男の子は小さな弟を連れ去りながら、私の方をば振り向こうともしなかつた。

私は毎日のように、そのどんな隅々すみずみまでもよく知っている筈はずだ。だつた村のさまざまな方へ散歩をしに行つた。しかし何処へ行つても、何物かが附加つけくわえられ、何物かが欠けているように私には見えた。その癖くせ、どの道の上でも、私の見たことのない新しい別荘かけの蔭に、一むれの灌木が、私の忘れていた少年時的一部分のように、私を待ち伏せてぶいた。そうしてそれらの一むれの灌木そつくりたのにこんがらかつたまま、それらの少年時の愉たのしい思い出も、悲しい思い出も私に蘇よみがつて来るのだつた。私はそれらの思い出に、或あるは胸をしめつけられたり、或は胸をふくらませたりしながら歩いてあるいた。私は突然とつぜん立ち止まる。自分があんまり村の遠くまで来すぎてしまつているのに気がついて。——そんなみちみち私の

出遇であうのは、ごく稀まれには散歩中の西洋人たちもいたが、大概たいがい、  
枯枝を背負せおつてくる老人だとか蕨わらびとりの帰りらしい籃かごを腕うでにぶら  
下げた娘たちばかりだった。それ等のものはしかし、私にとつて  
はその村の風景のなかに完全に雑まじり込んで見えるので、少しも私  
のそういう思い出を邪魔じゃましなかつた。もつとも時たま、或る時は  
私があんまり子供らしい思い出し笑いをしているのを見て、すれ  
ちがいざまいきなり私に声をかけて私を愕おどろかせたり、又或る時は  
向うから私に微笑ほほえみかけようとして私の悲しげな顔を見てそれを  
途中で止やめてしまうようなこともあるにはあつたが……。

そんな風に思い出に導かれるままに、村をそんな遠くの方まで  
知らず識しらず歩いて来てしまった私は、今更のように自分も健康

になつたものだなあ、と思つた。私はそういう長い散歩によつて一層生き生きした呼吸をしている自分自身を見出した。それにこの土地に滞在してからまだ一週間かそこいらにしかならないけれど、この高原の初夏の氣候が早くも私の肉体の上にも精神の上にも或る影響えいきようを与え出していることは否いなめなかつた。夏はもう何処にでも見つけられるが、それでいてまだ何処あてという的もないでいると言つたような自然の中を、こうしてさ迷いながら、あちこちの灌木の枝には注意さえすれば無数の荅つぼみが認められ、それ等はやがて咲き出さすだろうが、しかしそれ等は真夏の季節シーズンの来ない前に散つてしまうような種類の花ばかりなので、それ等の咲き揃そろうのを楽しむのは私一人ひとりだけであろうと言う想像なんかをして

いると、それはこんな淋しい田舎暮しのような高価な犠牲を払う  
 だけの値は十分にあると言つていいほどな、人知れぬ悦樂のよ  
 うに思われてくるのだつた。そうして私はいつしか「田園交  
 響曲」の第一楽章が人々に与える快い感動に似たもので心を一  
 ぱいにさせていた。そうして都会にいた頃の私はある限り自分の  
 ぼんやりした不幸を誇張し過ぎて考えていたのではないかと疑  
 い出したほどだつた。こんなことなら何もあんなにまで苦しみな  
 くともよかつたのだと私は思いもした。そうして最近私を苦しめ  
 ていた恋愛事件をそっくりそのままに書いてみたら、その苦し  
 みそのものにも氣に入るだろうし、私にはまだよく解らずにいる  
 相手の気持もいくらか明瞭しはしないかと思つて、却つてそうい

う私自身の不幸をあてにして仕事をしに来た私は、ために困惑こんわくしたほどであった。私はてんでもうそんなものを取り上げてみようという気持すらなくなってしまうのだ。で、私は仕事の方はそのまま打棄うっちゃらかして、毎日のように散歩ばかりしていた。そうして私は私の散歩区域を日毎ひごとに拡げて行つた。

或る日私がそんな散歩から帰つて来ると、庭掃除にわそうじをしていた宿の爺じいやに呼び止められた。

「細木さんはいつ頃こちらへお見えになりますか？」

「さあ、僕ぼく、知らないけれど……」

それは私が何日頃この地を出発するかを聞いたのと同じことで

あるのに爺やは気づきようがなかったのだ。

「去年お帰りになるとき」と爺やは思い出したように言った。

「庭へ羊齒しだを植えて置くようにと言われたんですが、何処へ植えろとおっしゃったんだか、すっかり忘れてしまいましたもんで……」

「羊齒をね」私は鸚鵡おうむがえしに言った。それから私は例の白い柵さくに取り囲まれたヴィラを頭に浮べながら、「あの白い柵はいつ出来たの？」と訊きいた。

「あれですか……あれは一昨年でした」

「一昨年ね……」

私はそれつきり黙だまっていた。爺やのいじくっている植木の一つ

へ目をやりながら。それからやつとそれに白い花らしいもの咲いているのに気がつきながら訊いた。

「それは何の花だい？」

「これはシャクナゲです」

「シャクナゲ？ ふうん、そう言えば、じいやさん、このへんの野薔薇のばらはいつごろ咲くの？」

「今月の末から、まあ、来月の初めにかけてでしょうな」

「そうかい、まだ大ぶあるんだね。——一体、どのへんが多いんだい？」

「さあ……あのレエノルズさんの病院の向うなんか……」

「ああ、じゃ、あそこかな、あの絵葉書にあつた奴やつは。……」

その翌朝は、霧がひどく巻いていた。私はレエンコートきりをひっかけ、まだ釘づけにされている教会の前を通り、その裏の橡とちの林の中を横切って行った。その林を突き抜けると、道は大きく曲りながら一つの小さな流れに沿うて行った。しかしその朝はその流れは霧のためにちつとも見えなかった。そしてただ、せせらぎの音ばかりが絶えず聞えていた。私はやがて小さな木橋を渡った。それからその土手道どてみちは、こんどは今までとは反対の側を、その流れに沿うて行くのであった。さて、その土手道へ差しかかろうとした途端、私はふと立ち止まった。私の行く手に何者かが異様なかっこう恰好かっこうでうずくまっているのが仄見ほのみえたので。その異様なものは、

霧のなかで私自身から円光のように発しているかに見える、私を中心にして描いた円状の薄明りの、丁度その円周の上にもうずくま  
っているのだった。しかし霧は絶えず流れているので、或る時は  
一層濃いのが来てその人影をほとんど見えなくさせるが、やが  
てそれが薄らいで行くにつれてその人影も次第にはつきりしてく  
る。漸つとそれが蝙蝠傘の下で、或る小さな灌木の上にも気づ  
かわしげに身を踏めている、西洋人らしいことが私には分かり出  
した。もつと霧が薄らいだとき、私はその人の見まもっているの  
が私の見たいと思っていた野薔薇の木らしいことまで分かった。  
向うでは私のことに気づかないらしかった。そのため、誰にも見  
られていないと信じながら何かに夢中になっている時、ややもす

ると、あとでそれを思い出そうとしても思い出せないような変にむつかしい姿勢をしていることがあるものだが、私の行く手を塞いでいるその人も恐らくそんな時の姿勢をしているのにちがいはなかった。……気がついて見ると私のすぐ傍らにもあつた野薔薇の木を、それが私の見たいと思つている野薔薇の木のほんのデッサンでしかないように見やりながら、私はそのままじつと佇んでいた。——やつとその人影は身を起し、蝙蝠傘をちよつと持ちかえてから歩き出した。そうしてずんずん霧のなかに暈けて行つた。

私も歩き出しながら、やつとその野薔薇の小さな茂みの前に達した。そうして今しがたその人のしていたような難しい姿勢を真似ながら、その上に身を踞めてみた。そうすればその人の心の状

態までが見透かされでもするかのよう。その小さな茂みはまだ  
硬いかた小さな荅をつぼみ一ぱいにつけながら、何か私に訴えうったでもしたいよ  
うな眼つきで私を見上げた。私は知らず識しらずの裡うちにそれらの荅  
を根気よく数えたり、そつと持ち上げてみたりしている自分自身  
に気がついた。ふとさっきの人のしていた異様な手つきがまざま  
ざと蘇よみがえつた。そうしてその小さな茂みがマイ・ミクスチュアらし  
い香かおりを漂ただよわせているのに気がついたのもそれと殆ほとんど同時だつ  
た。湿しめった空気のために何時いつまでもそのこんがらかった枝にから  
みついて消えずにいるその香りは、まるでその小さな茂みそのも  
のから発せられているかのようはなに思われた。——私はいつもパイ  
プを口から離はなしたことの無いレエノルズさんのことを思い出した。

そして今の人影はその老医師にちがいないと思つた。そう言えば、さつきから向うの方に霧のために見えたり隠れたりしてゐる赤茶けたものは、そのサナトリウムの建物らしかつた。

私は再び霧のなかの道を、神々こころこしいような薄光りに包まれながら、いくら歩いてもちつとも自分の体が進まないようなもどかしさを感じながら、あてもなく歩き続けていた。私の心はさつき霧の中から私を訴えるような眼つきで見上げた野薔薇のことで一杯つばいになつていた。私はそれらの白い小さな花を私の詩のためにさんざん使つて置きながら、今日までその本物をろくすつぽ見もしなかつたけれど、今度こそ、私もそれらの花に対して私のありつたけの誠実を示すことの出来る機会の来つつあることを心から

喜んでいた。そしてそのための私の<sup>よろこ</sup>歓ばしさと言ったら、昔<sup>むかし</sup>の詩人等が野薔薇のために歌った詩句を、口ずさむなんと言うのではなく、それを知っているだけ残らず大きな声で<sup>どな</sup>呶鳴り散らしたいような衝<sup>しょうどう</sup>動にまで、私を<sup>か</sup>駈り立てるのであった。

私の書こうとしていた小説の主題は、<sup>ようや</sup>漸くその日その日を樂しむことが出来るようになったこんな田<sup>いな</sup>舎<sup>かぐら</sup>暮しの中では、いよいよ無意味なものに思われて来た。それに、そんなものを書くことは、自分で自分を一層どうしようもない破<sup>は</sup>目<sup>め</sup>に<sup>おと</sup>陥し入れるようなもの

であることにも気がついたのだ。「アドルフ」の例が考えられた。ああいうものにまで私は自分の小さな出来事を引き揚げたかっただのだ。弱気でしかも自我の強いために自分自身も不幸になり、他人をも不幸にさせたところのアドルフの運命は又、私の運命さながらに思えたからだ。しかし、「アドルフ」の作者ほど、そういう弱々しい性格（恐らくそれは彼自身のであろうけれど）に対するはげしい憎悪も持っていない、むしろそういう自分自身を甘やかすことしか出来そうもない私がそんな小説の真似なんかしようものなら、それによって更にもう一層自分自身をも、又他人をも不幸にするばかりであることが、わかり過ぎるくらい私にはわかって来たのだ。……こういうような考え方は、私の暗い半身には

すこし気に入らないようだったけれども、この頃のこんな田舎暮しのお蔭かげで、そう言った私の暗い半身は、もう一方の私の明るい半身じよじよに徐々じよじよに打負かされて行きつつあったのだ。

そうして今の私がそれならば書いてもみたいと思うものは、たとえどんなに平へいほん凡なものでもいいから、これから私の暮らそうとしているようなこんな季節はずれの田舎の、人っ子ひとりいな、しかし花だらけの額縁がくぶちの中へすっぽりと嵌はまり込むような古い絵のような物語であった。私は何とかしてそんな言わば牧歌的なものが書きたかった。私はこれまでも他人の書いたそういう作品を随ずいぶん分ぶん好きでもあり、そういう出来事に出遇であったということでその人を羨うらやましくも思つて来たが、私自身でそう言うものを

書いてみようとも、又、書けそうにも思えなかった。が、それだけ一層、今の私はそういう牧歌的なものを書いてみたいと思いつたのである。——私はしかし、それを書くためには、いま自分の暮らしつつあるこの村を背景にするよりほかはなく、と言つてひとつき

一月や二月ぐらいの滞在中にそういう出来事が果して私の身边に起り得るものかどうか疑わしかった。莫迦莫迦しいことだが、私は何度も林の中の空地で無駄に待ち伏せたものだった。男の子のように美しい田舎の娘がその林の中からひよっこり私の前に飛び出して来はしないかと。……そんな空しい努力の後、やっと私の頭に浮んだのは、あのお天狗様のいる丘のほとんど頂近くにある、あの見棄てられた、古いヴィラであつた。あのヴィラを背景

にして、そこに毎夏を暮らしていた二人の老嬢ろうじょうのいかにも心もとなげな存在を自分の空想で補いながら書いて行く——それなら何んだか自分にもちよつと書けそうな気がした。この間その家の荒廢こうはいした庭のなかへ這入はいこり込んで其処そこから一時間ばかり眺めながていた高原の美しい鳥瞰ちようかんず図だの、一かどのニイチエアンだった学生の時分からうろおぼえに覚えていた zweisam という、いかにもその老嬢たちに似つかわしいドイツ語だのを、ひよつくりと思ひ浮べながら……。

或る夕方、私は再びそのヴィラまで枯葉かれはに埋うずまった山径やまみちを上つて行つた。庭の木戸は私がそうして置いたままに半ば開かれていた。私の捨てた煙草たばこの吸殻すいからがヴェランダの床ゆかに汚点しみのよう

落ちていた。私は日の暮れるまで、其処から林だの、赤い屋根だの、丘だの、それから真正面に聳そびえている「巨人きよじんの椅子いす」だのを、一々暗記してしまふほど熱心に見つめていた。……ときどき、こんな夕暮れ時に、二人のうちの私のよく覚えている方の神々しいような白髪はくはつの老婦人が、このヴェランダの、そう、丁度私の坐すわっているこの場所に腰こしを下ろしたまま、彼女かのじよのとうに死んでいる友人と話し合つてでもいると言つたような、空虚うつろな眼まなざしがまざまざと蘇よみがへってくる……と思うと、一瞬しゆんかん間それがきらきらと少女の眼まなこざしのようにかがやく……家の中からは夕餉ゆうげの支度したくをしている、もう一方の婦人の立てる皿さじらの音が聞えて来る……彼女かのじよはふと十字を切ろうとするように手を動かしかけるが、それはほ

んの下描きしたかで終つてしまふ……彼女にだけは一種の言語をもつて  
いそうな氣のする「巨人の椅子」……そんな一方の老嬢のさまざ  
まな姿だけは、私が実際にそれらを見て、そして無意識の裡うちにそ  
れらを記憶きおくしていたのではないかと思えるくらい、まざまざと蘇  
つて来るが、——もう一人の老嬢の方は、いつまでも皿の音ばか  
りさせていて、容易に私の物語の中には登場して来ようとはしな  
い。私はどうしても彼女の倂おもかげを蘇らすことが出来ないのである。

……

そんな或る午後、私のあてもなくさまよっていた眼ざしが、急  
に注意深くなつて、私の丁度足許あしもとにある夕日のあたつている赤  
い屋根の上にとまつた。何か黒い小さなものがその屋根の頂きか

らころころと転がって来ては、ひさし庇のところから急に小石のように墜つ落らくして行くのだった。しばらく間を置いては又それをやってゐる。私は何だろうと思つて、眼を細くしながら見まもつていた。そうしてそれ等が二羽の小鳥であることを認めた。それ等が交尾こうびをしながら、庇のところまで一いっ緒しょに転がって来ては、そこから墜落すると同時に、さあふたまたと二ふた又またに飛びわかれていたのだつた。同じ小鳥たちなのか、他ほかの小鳥たちなのか分らないが、それが何回となく繰くり返かえされている。——これは私の物語の中にとり入れてもいいぞ、と思ひながら私はそれを飽あかずに見まもつてゐる。——こんな風にして、自分の見つつあるものが自分の構想しつつかある物語の中へそのままエピソードとして溶とけ込んで来ながら、自

分からもすると逃げて行つてしまひそうになる物語の主題を少しずつ発展させているように見える……。

アカシアの花が私の物語の中にはいつて来たのもそんな風であつた。その咲き出す頃が丁度私の田舎暮しもそのクライマックスに達するのではないかというような予覚のする、例の野薔薇の蒼つぼみの大きさや数を調べながら、あのサナトリウムの裏の生いけがき牆かきの前は何なんべん遍べんも行つたり来たりしたけれど、その方にはばかり気を奪とられていた私は、其処から先きの、その生牆なみきに代つてその川べりの道を縁ふちどりだしているアカシアの並木なみきには、ついで注意をしたことがなかつた。ところが或る日のこと、サナトリウムの前まで来かかつた時、私の行く手の小径こみちがひどく何時いつもと變つてい

うに見えた。私はちよつとの間、それから受けた異様な印象に戸と惑まどいた。私はそれまでアカシアの花をつけているところを見たことがなかつたので、それが私の知らないうちにそんなにも沢たくさ山んの花を一どに咲かしているからだとは容易に信じられなかつたのであつた。あのかよわそうな枝えだぶりや、織せんさい細さいな楕だ円えん形の軟やわらかな葉などからして私の無意識の裡に想像していた花と、それらが似てもつかない花だつたからであつたかも知れない。そしてそれらの花を見たばかりの時は、誰かが悪いっすう戯ずをして、その枝々おびただに夥おびしい小さな真まつ白しろな提ちよう灯ちんのようなものをぶらさげたのではないかと言うような、いかにも唐とう突とつな印象を受けたのだつた。やつとそれらがアカシアの花であることを知つた私は、その日は

その小径をずっと先きの方まで行ってみることにした。アカシアの木立の多くは、どうかするとその花の穂先ほさきが私の帽子ぼうしとすれすれになる位にまで低くそれらの花をぶんぶん匂におわせながら垂らしていたが、中にはまだその木立が私の背ぐらいしかなくって、それが殆ど折れそうなくらいに撓しないながら自分の花を持ち耐たえている傍そばなどを通り過ぎる時は、私は何んだか切ないような気持ちにすらなつた。アカシアの並木は何処どこまで行つても尽つきないように見えた。私はとうとう或る大きなアカシアを撰えらんでその前に立ち止まった。私は何とかしてこれらのアカシアの花が私に与えたさつきほんやくの唐突な印象を私自身の言葉に翻ほんやく訳して置きたいと思つたのだ。それらの花のまわりには無数の蜜蜂みつばちがむらがり、ぶんぶん

唸<sup>うな</sup>り声を立てていた。しかしそれらの蜜蜂は空気のなかで何処で唸<sup>うな</sup>っているともつかなかったし、それに私はさつきから自分の印象をまとめようとしてそれにばかり夢<sup>むちゆう</sup>中<sup>ちゆう</sup>になつていたので、そんな唸<sup>うな</sup>り声にふと気づく度<sup>たびごと</sup>毎<sup>まい</sup>に、何んだか私自身の頭脳<sup>づのう</sup>がひどい混乱のあまりそんな具合<sup>ぐあい</sup>に唸<sup>うな</sup>り出しているのではないかと言うような気もされた。……

その村の東北に一つの峠<sup>とうげ</sup>があつた。

その旧道には樅<sup>もみ</sup>や山毛櫨<sup>ぶな</sup>などが暗いほど鬱<sup>うっ</sup>蒼<sup>そう</sup>と茂つていた。

そうしてそれらの古い幹には藤ふじだの、山葡萄やまぶどうだの、通草あけびだのの蔓つる草が実にややこしい方法で絡からまりながら蔓延まんえんしていた。私が最初そんな蔓草に注意し出したのは、藤の花が思いがけない縦の枝からぶらさがっているのにびっくりして、それからやつとその縦に絡みついていて藤づるを認めてからであつた。そう言えば、そんなような藤づるの多いことつたら！ それらの藤づるに絡みつかれている縦の木が前よりも大きくなつたので、その執拗しつような蔓がすっかり木肌きはだにめり込んで、いかにもそれを苦しそうに身もだえさせているのなどを見つめると、私は無気味になつて来てならない位みちだつた。——或る朝、私は例の気まぐれから峠まで登つた帰り途、その峠の上にある小さな部落の子供等ら二人と道づ

れになつて降りて来たことがあつた。その折のこと、その子供たちはいろいろな木に絡まつている、もつと他の山葡萄だの、通草だのを私に教えてくれたのだつた。子供たちは秋になるとそれ等の実を採りに来るので、それ等のある場所を殆んど暗記していた。それからまた小鳥の巢すのある場所を私に教えてくれたりした。彼等は峠で力ちからもち餅などを売っている家の子供たちであつた。大きい方の子は十一二で、小さい方の子は七つぐらいだつた。三人兄弟なのだが、その真ん中の子が村の小学校からまだ帰らぬので峠の下まで迎えむかに行くのだと言つていた。

子供たちは何を見つけたのか急に私を離れて、林のなかへ、下生えを掻かき分けながら駈けこんでいった。そうして一本のやや大

きな灌木かんぼくの下に立ち止まると、手を伸ばしてその枝から赤い実を揉もぎとつては頬張ほおぼつていた。それは何の実だと訊きいたら、「菜な莢みだ」と彼等は返事をした。そうして彼等はずきどき私の方をふり向いて手招きをしたが、私が下生えじやまに邪魔をされてなかなか其処まで行くことが出来ずにいると、大きい方の子がその実を少しばかり私のために持って来てくれた。私は子供たちの真似まねをしてそれを一つずつこわごわ口に入れてみた。なんだか酸すっぱかった。私はしかしそれをみんな我慢がまんをして嘸のみ込んだ。そうして子供たちが低い枝にあった実をすっかり食べつくしてしまふと、今度は高くて容易に手の届きそうもない枝をしきりに手たぐるうとしては失敗しているのを、私は根氣よく、むしろ面おもしろ白しろいものでも見て

いるように見入っていた。

子供たちはまた林の中のいろいろな抜け道を私に教えてくれようとした。そうして急な草深い斜面をずんずん駆け下りて行った。私はそのあとから危かしそうな足つきでついて行った。ほとんど何処からも日の射し込んで来ないくらい、木立が密生して枝と枝との入りまじっているところもあった。かと思うと急に私たちの目の前が展けて、ちよつとの間何も見えなくなるくらい明るい林のなかの空地があったりした。私たちがそういう林の中の空地の一つへ辿り着いた時、突然、一つの小石が何処からともなく飛んで来て私たちの足許に落ちた。その飛んで来たらしい方を私たちがまぶしそうに振り向いた途端、数本の山毛櫨を背にし

ながら、ほとんど垂直なほど急な勾配こうばいの藁屋根わらやねをもつた、窓もなんにもないような異様な小屋の蔭かげへ、小さな黒い人影ひとかげが隠れるのを私たちは認めた。それを知つても、しかし、私の小さな同伴者うはんしやたちは何も罵ろうとせず、却かえつて私に向つて何かその言訣いいわでもしたいような、そしてそれを私に言い出したものかどうかと躊躇ためらつているような、複雑な表情をして私の方を見上げていたので、私は不審ふしんそうに、

「あの子は白痴ぼかなのかい？」と訊いた。

子供たちは顔を見合わせていた。それから大きい方の子が低声こごえで私に答えた。

「そうじゃないよ。——あれあ気持ちがいむすめの娘だ」

「ふん、それであんな変な家にいるんだね？」

「あれあ こおりぐら 氷 倉だ。——あの向うの家だ」

しかしその氷倉だという異様な かつこう 恰好をした藁小屋に さえ 遮ぎられて、その家らしいもの的一部分すら見えないところを見ると、おそ 恐らく小さな ほったて 掘立小屋かなんかに ちが 違いなかつた。

「気がいっておとつあんがかい？」

「……」 兄も弟も同時に頭を振った。

「じゃ、おつかさんの方だね？」

「うん……」 そう答えてから、兄は弟の方を見い見い誰に だれ 言うともなく言った。「ときどき川んなかで どな 吠鳴っているなあ」

「おれも一度向うの川で見た」 弟の返事である。

「向うって何処だ？」

「向うの方だ」弟は何んだか自信のなさそうな、いまにも泣き出しそうな顔をして、漠然ぼくぜんと或る方向あを私に指して見せた。

「そうか」私はわかったような振りをした。「……おとつあんは何をしているんだ？」

「木樵きこりだなあ」とこんどはまた兄が弟の方を見い見い言った。「変なとつあんだ」弟は顔をしかめながらそれに答えた。

氷倉の蔭から、再びちらりと小娘らしい顔が出たようだったけれど、私たちの方からは丁度逆光線だったので、よくもそれを見分けないうちに、その顔はすぐ引つ込んでしまった。それつきりその小娘は顔を出さなかった。ただ私たちはそれから間もなく異

様な叫びさけを耳にした。それはその小娘が私たちを罵ったのか、それとも私たちには見えぬ小屋の中からその小娘に向つてそれが叫ばれたのか、それとも又また、その裏の林のなかで山鳩やまばとでも啼ないたのだろうか？ ともかくも、その得体えたいの知れぬアクセントだけが妙みょうに私の耳にこびりついた。——が、私たちは無言のまま、ただちよつと足を早めながら、その空地を横切つて行つた。私たちはそれから再び林の中へ這入はいつた。その中へ這入ると急に薄暗うすぐらくなつたようだけれど、私たちの眼底にはいまの空地の明るさがこびりついているせいか、暫しばらく私たちの周りには一種異様な薄明りが漂ただよっているように見えた。そんな林の中をずんずん先きになつて駈かけ下りて行く子供たちの跡あとについて行きながら、彼等がい

まだに何となく昂奮こうふんしているらしいのを、私は漠然と感じていた。そうして、こんな風に彼等と一緒に峠を下りて行く私は一体彼等にはどんな人間に見えているのだろうか？ とそういう現在の私自身にも興味を持ったりした。

峠を下り切ったところに架かつている白い橋の上に、小さな男の子が一人、鞆かばんを背負せおったまま、しよんぼりと立っていた。私の連れ立っている子供たちがその男の子に同時に声をかけた。彼等を見るとその男の子はにっこりと微笑びしょうした。が、私にも気がつく、人見知りでもするかのように、橋の下の溪流けいりゅうの方へその小さな顔をそむけた。私も私で、しばらくその溪流をぼんやり見下ろしていた。さつき林のなかの空地で子供の一人ひとりが漠然と指したそ

のずっと上流にあたる方を心のうちに描きながら。それから私は三人の子供たちに小銭こぜにをすこし与あたえて、彼等と別れた。

雨が降り出した。そうしてそれは降り続いた。とうとう梅雨期ばいうきに入ったのだった。そんな雨がちよつと小止おやみになり、峠の方が薄明るくなって、そのまま晴れ上るかと思うと、峠の向側からやつと匍はい上つて来たように見える濃霧のうむが、峠の上方一面にかぶさり、やがてその霧がさあと一気に駈け下りて来て、忽たちまち村全帯の上に拡ひろがるのであった。どうかすると、そういう霧がずんずん薄

らいで行って、雲の割れ目からすみれいろ 堇色の空がちらりと見えるよ  
うなこともあつたが、それはほんの一瞬間きりで、霧はまた次第  
に濃こくなつて、それが何時いつの間にか小雨こさめに變つてしまつていた。

私はその暗い雲の割れ目からちらりと見える、何とも言えずに  
綺麗きれいな、その堇色がたまらなく好きであつた。そうしてそれは、  
殆ほとんど日課のようにしていた長い散歩が雨のために出来なくなつ  
ている私にとっては、たとえ一瞬間にもしろそれが見られたら、  
それだけでもその日の無聊ぶりようが償つぐなわれたようにさえ思われた程ほどで  
あつた。——「おまえの可愛かわい眼の堇、か……」そんなうろお  
ぼえのハイネの詩の切れっぱしが私の口をふと衝ついて出る。「ふ  
ん、あいつの眼が、こんな堇色じゃなくって仕合せというものだ。

そうでなかった日にや、おれもハイネのようにこう眩つぶやきながら嘆なげいてばかりいなきやなるまい。——おまえの眼の董はいつも綺麗きれいに咲さくけれど、ああ、おまえの心ばかりは枯かれ果てた……」

そんな鬱うつとう陶とうしいような日々も、相変らず私の小説の主題は私からともすると逃げて行きそうになるが、私はそれをば辛しん抱ぼうづよく追いまわしている。私が最初に計画していたところの私自身を主人公とした物語を書くことはとづくに断念していたけれど、私はその代りに、その物語の主人公には一体どんな人物を選んだらいいのか、それからしてもう迷っていた。……どうにか一方の老ろうじょう嬢じょうは私の物語の中に登場させることは出来ても、もう一方の方は台所で皿さらの音ばかりさせているきりで、何時まで経たって

もヴェランダに出て来ようとしなない二人の老嬢たちの話、冬になるとすつかり雪に埋うずまってしまふこんな寒村に一人の看護婦を相手に暮くらしている老医師とその美しい野薔薇のばらの話、ときどき気が狂くるつて溪流のなかへ飛び込こんでは罵ののりわめいているという木樵きこりの妻とその小娘の話、——そういうような人達のとりとめもない幻イ像マアジユばかりが私の心にふと浮うかんではふと消えてゆく……

或る午後、雨のちよつとした晴れ間を見て、もうぽつぽつ外人たちの這入りだした別べつ荘そうの並ならんでいる水車の道のほとりを私が散歩をしていたら、チエツコスロヴァキア公使館の別荘の中から誰かがピアノを稽古けいこしているらしい音が聞えて来た。私はその隣となりのまだ空いている別荘の庭へ這入りこんで、しばらくそれに耳

を傾<sup>かたむ</sup>けていた。バッハのト短調の遁走<sup>フウゲ</sup>曲らしかった。あの一つの旋律<sup>メロディ</sup>が繰<sup>く</sup>り返され繰<sup>く</sup>り返されているうちに曲が少しずつ展開して行く、それがまた更に稽古<sup>キコ</sup>をしているために三四回ずつひとところを繰<sup>く</sup>り返されているので、一層それがたゆたいがちになっていく。……それを聴<sup>き</sup>いているうちに、私はまるで魔<sup>ま</sup>にでも憑<sup>つ</sup>かれたような薄気味のわるい笑いを浮べ出していた。そのピアノの音のたゆたいがちな効果が、この頃<sup>ころ</sup>の私の小説を考え悩<sup>なや</sup>んでいる、そのうちにそれがどうやら少しずつ発展して来ているような気がする、そう言った私のもどかしい気持さながらであったからだ。

或る朝、「また雨らしいな……」と溜息ためいきをつきながら私が雨戸を繰ろうとした途端に、その節穴ふしあなから明るい外光が洩もれて来ながら、障子しょうじの上にくつきりした小さな楕円形だえんけいの額縁がくぶちをつくり、そのなかに数本の落葉松からまつの微細画ミニユアチユアを逆さまに描いているのを認めると、私は急に胸をはずませながら、出来るだけ早くと思つて、そのため反かえつて手間どりながら雨戸を開けた。私が寝ね床どこのなかで雨音かと思つていたのは、それ等の落葉松の細かい葉たまに溜たまつていた雨滴が絶えず屋根の上に落ちる音だったのだ。私はさて、まぶしそうな眼つきで青空を見上げた。私は寝間着のまま一度庭のなかへ出てみたが、それから再び部屋に帰り、そしてフ

ラノの散歩服に着換えながら、早朝の戸外へと出て行つた。私は教会の前を曲つて、その裏手の橡とちの林を突き抜けて行つた。私はときどき青空を見上げた。いかにもまぶしそうに顔をしかめながら。

私が小さな美しい流れに沿うて歩き出すと、その徑みちにずっと笹さ縁さへりをつけている野苺のいちごにも、ちよつと人目につかないような花

が一ぱい咲いていて、それが或る素晴すばらしいもののほんの小さな前奏曲プレリユードだと言つたように、私を迎えた。私は例の木橋の上まで

来かかると、どういう積りか自分でも分からずに二三度その上を行つたり来たりした。それから、漸やつと、まるで足が地上につかないような歩調で、サナトリウムの裏手の生いけ牆がきに沿うて行つた。

私は最初のいくつかの野薔薇の茂みしげを一種の困惑こんわくの中にうっかりと見過してしまったことに気がついた。それに気がついた時は、既に私は彼等の発散すてしてしまつたことに気がついた。そして雨上りの湿しめつた空気のため、一とところに漂いながら散らばらないでいる異常な香りかおの中に包まれてしまつていた。私は彼等の白い小さな花を見るよりも先に、彼等の発散する香りの方を最初に知つてしまつたのだ。しかし私は立ち止ろうとはせずになおも歩き続けながら、私は今すれちがいつつある一つの野薔薇の上に私のおずおずした最初の視線を投げた。私は、私の胸のあたりから何かを訴うえでもしたいような眼つきで私をじつと見上げている、その小さな茂みの上に、最初二つ三つばかりの白い小さな花を認めたきりだつた。が、その次の

瞬<sup>しゅんかん</sup>間<sup>かん</sup>

には、私はその同じ茂みのうちに殆ど二三十ばかりの花と、それと殆ど同数の半ば開きかかった荅<sup>つばみ</sup>とを数えることが出来た。それはごく僅<sup>わず</sup>かの間だったが、そんな風に私が自分の視線のなかに自分自身を集中させてしまつてからと言うもの、そんなにも簇<sup>むら</sup>がつているそれ等の花がもう先刻<sup>さつき</sup>のように好い匂<sup>におい</sup>がしなくなつてしまつていふことに私は愕<sup>おどろ</sup>いた。そうして改めてそれを嗅<sup>か</sup>ぐうとすると、そうするだけ一層それは匂わなくなつて行くように見えた。——私は注意深く歩き続けながら、順ぐりにいくつかの野薔薇の木とすれちがつて行つたが、とうとう私はいつかレエノルズ博士がその上に身を跣<sup>こき</sup>めていた一つの茂みの前まで来た。私は思はずそこに足を停<sup>と</sup>めた。——

そうして私はその野薔薇の前に、ただ茫然<sup>ぼうぜん</sup>として、何を考えていたのか後で思い出そうとしても思い出せないようなことばかり考えていた。どれよりも最も多くの花を簇<sup>たば</sup>がらせているように見えるその野薔薇とそっくりそのままのものを何処<sup>どこ</sup>かで私は一度見たことがあるように思えて、それをしきりに思い出そうとしていたかのようでもあった。——それはすこし長い放心状態の後では、しばしば私にやってくるところの一種独特の錯覚<sup>さつかく</sup>であった。放心のあまりに現在そのものの感じがなくなり、私は現在そのものをしきりに思い出そうとして焦<sup>あせ</sup>っているのかも知れなかった。

——それから私は再び我に返って歩き出した。私の沿うて行く生牆<sup>かんぼく</sup>には、それらの野薔薇が、同じような高さの他の灌木<sup>かんぼく</sup>の間に

雑<sup>まし</sup>りながら、いくらかずつの間を置いてはならんでいるのだった。あたかも彼等が或る秘密な法則に従つてそう配置されてでもいるかのように。そうしてその微<sup>び</sup>妙<sup>みょう</sup>な間<sup>かん</sup>歇<sup>けつ</sup>が、ほとんど足が地につかないような歩調で歩きつつある私の中に、いつのまにか、ほとんど音楽の与えるような一種のリズミカルな効果を生じさせていた。……そうしてそれに似た或る思い出をこんどはさつきと異つて、鮮<sup>せん</sup>明<sup>めい</sup>に私のうち<sup>よみがえ</sup>に蘇<sup>よみがえ</sup>らせるのであつた。……十年ぐらい前の或る夏休みに、私が初めてこの村へ来た時のこと、宿屋の裏から水車場のある道の方へ抜けられるようになって、やつと一人<sup>ひとり</sup>だけ通れるか通れない位の、狭<sup>せま</sup>い、小さな坂道を上つて行く<sup>とちゆう</sup>とした途<sup>とちゆう</sup>中で、私はその坂の上の方から数人の少女たちが笑

いさぎめきながら駈<sup>か</sup>け下りるようにして来るのに出<sup>で</sup>遇<sup>あ</sup>った。私はそれを認めると、そういう少女たちとの出<sup>であ</sup>いは私の始<sup>ゆ</sup>終<sup>め</sup>夢みていたものであったにも拘<sup>か</sup>わらず、私はよつぽど途中から引<sup>ひ</sup>返<sup>か</sup>してしまおうかと思つた。私は躊<sup>ち</sup>躇<sup>う</sup>していた。そういう私を見ると、少女たちは一層笑い声を高くしながら私の方へずんずん駈<sup>か</sup>け下りて来た。そんなところで引<sup>ひ</sup>返<sup>か</sup>したりすると余計自分が彼女たちに滑<sup>こ</sup>稽<sup>けい</sup>に見えはしまいかと私は考え出していた。そこで私は思い切<sup>き</sup>つて、がむしやらにその坂を上<sup>あ</sup>つて行<sup>い</sup>つた。するとこんどは少女たちの方で急に黙<sup>だ</sup>つてしまつた。そうしてやつと笑<sup>わ</sup>うのを我<sup>が</sup>慢<sup>まん</sup>しているとも言<sup>い</sup>つたような意<sup>い</sup>地<sup>ぢ</sup>悪<sup>あく</sup>そうな眼<sup>ま</sup>つ<sup>ま</sup>つきをして、道<sup>みち</sup>ばたの丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>彼女たちのせいぐらいある灌木<sup>かんぼく</sup>の茂<sup>さ</sup>みの間に一人一人半身

を入れながら、私の通り過ぎるのを待っていた。私は彼女たちの前を出来るだけ早く通ろうとして、そのため反<sup>かえ</sup>つて長い時間かかって、心臓をどきどきさせながら通り過ぎて行つた。……その瞬間私は、自分のまわりにさつきから再び漂いだしている異常な香りに気がついて愕いた。私がそんな風に私の視線を自分自身の内側に向け出して、ひよいと野<sup>の</sup>薔<sup>ばら</sup>薇のことを忘れていたら、そういう気まぐれな私を責め訴えるかのように、その花々が私にさつきの香りを返してくれたのだつた。そう、それ等の少女たちの形づくつた生<sup>いけがき</sup>牆はちようどお前たちにそっくりだつたのだ！ ……

私はその朝はどうしたのかクレゾオルの匂のぷんぷんするサナトリウムの手前から引返した。その向うには、その思いがけない

美しきでひととき私の心を奪<sup>うば</sup>っていたアカシアの花が、一週間近い雨のためにすっかり散つて、それが川べりの道の上にところどころ一<sup>ひとかたま</sup>塊<sup>かたまり</sup>りになりながら落ちているのがずっと先きの先きの方<sup>みとお</sup>まで見透<sup>みとお</sup>されていた。

それから数日間、こんどはお天気の良い日ばかりが続いていた。毎朝私は起きるとすぐその辺まで散歩に行つた。しかし私はその花をつけた生牆の前にあんまり長いこと立ちもとおっていないで、それに沿<sup>すじ</sup>うて素通<sup>すとお</sup>りして来るきりの方が多かつた。私は言わば、唯<sup>ただ</sup>、その生牆に間<sup>かん</sup>歇<sup>けつ</sup>的に簇<sup>むら</sup>がりながら花をつけている野薔薇の与える音楽的効果を楽しみさえすればよかつたのであるから。だから或る時などは、そののみを楽しむために、私は故意<sup>わざ</sup>とよそつ

ぼを見ながら歩いたりした。

或る朝、私はそんな風にサナトリウムの前まで行つてすぐそのまま引つ返して来ると、向うの小さな木橋を渡り、いまその生牆に差しかかったばかりのレエノルズ博士の姿を認めた。すぐ近く  
の自宅から病院へ出勤して来る途中らしかつた。片手に太いステ  
ツキを持ち、他ほかの手でパイプを握にぎつたまま、少し猫背ねこぜになつて生  
牆の上へ気づかわしそうな視線を注ぎながら私の方へ近づいて来  
た。が、私を認めると、急にそれから目を離はなして、自分の前ばか  
りを見ながら歩き出した。そんな気がした。私も私で、そんな野  
薔薇などには目もくれない者のように、そつぽを向きながら歩い  
て行つた。そうして私はすれちがいざま、その老人の焦しょうてん点を

失ったような空虚うつろな眼差まなざしのうちに、彼の可笑おかしいほどの狼狽ろうばいと、私を気づまりにさせずにおかないような彼の不機嫌ふきげんとを見抜みぬいた。

それから数日後の或る朝だった。だんだんに夏らしい色を帯び出して来た美しい空が、私にだけ、突然物悲とぎしく閉とざれてしまったように見えた。毎朝のようにそれに沿うて歩きながら、しかし、よく注意して見ようとはしないでいた野薔薇の白い小さな花が、いつの間によら殆ど全部蝕むしばまれて、それに黄褐おうかつしよく色のきたならしい斑はん点てんがどつきり出来てしまっていることに、その朝、私は始めて気がついたのだった。

……数年前までは半分壊れこわかかった水車のごとごと音を立てながら廻まわっていた小さな流れのほとりには、その大抵たいていが三四十  
前に外人の建てたと言われる古いバンガロオが雑木林ぞうきばやしの間に立  
ちならんでいたが、そこいらの小径こみちはそれが行きづまりなのか、  
通り抜けられるのか、ちよつと区別のつかないほど、ややっこし  
かったので、この村へ最初にやって来たばかりの時分には、私は  
ひとりで散歩をする時などは本当にまごまごしてしまうのだった。  
確かに抜け道らしいんだが、その小径は突然外人たちのお茶など  
を飲んでいるヴェランダのすぐ横を通ったりするのだった。そう

いう私道なのか、抜け道なのか分からないような或る小径に又しても踏み込んでしまった私は、私の背ぐらいある灌木の茂みの間から不意に私の目の前が展けて、その突きあたりにヴェランダがあり、籐の寝椅子に一人の淡青色のハアフ・コオトを着て、ふっさりと髪を肩へ垂らした少女が物憂げに靠れかかっているのを認め、のみならず、その少女が私の足音を聞きつけてひよいと私の方を振り向いたらしいのを認めるが早いかな、私は顔を赤らめながら、その少女をよく見ずに慌てて其処から引つ返してしまつた。——その時若し私がその少女をもつとよく見たら、それが数日前に私が宿屋の裏の狭い坂道ですれちがった数人の少女たちの中の一入であることに気がついて、私の狼狽はもつと大きかつた

だろうに。……

この頃刈<sup>か</sup>ったばかりらしい青々とした芝生<sup>しばふ</sup>が、その時にはその少女<sup>すわ</sup>の坐<sup>すわ</sup>っていたヴェランダをこつちからは見えなくさせていた一面の灌木の茂みに代えられて、そうしていま私のぼんやり立っているこの小径<sup>こみち</sup>からその芝生を真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>い柵<sup>さく</sup>が鮮<sup>あざ</sup>やかに区限<sup>くぎ</sup>つて。……そのように、すべてが變つていた。いま私にまざまざと蘇<sup>か</sup>つて来たところの、そう言うような、最初に私が彼女<sup>かのじよ</sup>に會つた當時の彼女のういういしい面影<sup>おもかげ</sup>と、数カ月前、最後に會つた時の、そしてその時から今だに私の眼先にちらついてならない彼女の冷やかな面影と、何と異つて見えることか！ 彼女の容貌<sup>ようぼう</sup>そのものがそんなにも變つたのか、それとも私の中にその幻<sup>イマアジユ</sup>像<sup>イマアジユ</sup>が變

ったのか、私は知らない。しかし何もかも、恐らく私自身も変つてしまつたのだ。……

私はそのとき向うの方から何かを重そうに担いながら私の方に近づいてくる者があるのを認めた。それは羊齒を背負っている宿の爺やであつた。私はいつか彼の話していた羊齒のことを思い出した。

私は爺やの言うがままに、彼についてその庭の中へおずおずと這入つて行つた。そうして爺やが庭の一隅にその羊齒を植えつけている間、私は黙つてヴェランダの床板に腰かけていた。爺やはときどき羊齒を植えつける場所について私に助言を求めた。その度毎に、私の胸はしめつけられた。

一通りみんな植えつけてしまうと、爺やは私のそばに腰を下ろした。私の与えた巻煙草まきたばこを彼は耳にはさんだきり、それを吸おうとはせずに、自分の腰から鉈なた豆まめの煙管きせるを抜ぬいた。

私はふだんの無口な習慣から抜け出ようと努力しながら、これもまた機嫌買きげんかひいらしい爺やを相手に世間話をし出した。

「爺やさん、峠とうげの途中に気ちがいの女がいるそうだけれど、それあ本当なのかい？」

「へえ、可哀かわいそうにすこし気が変なんでございますよ、——先せんにはうちでもちよいちよ何かくれてやりましたもので、よく山からにこにこしながら、いろんな花を採とって来てくれたりしましたっけが。……ただ、そいつの亭主ていしゅというのが大へんな奴やつでして

ね、こつちからわざわざ何か持って行ってやったりしますと、いつも酔<sup>よっぱら</sup>払<sup>はら</sup>つていちやあ、『くれるというものなら貫<sup>もら</sup>つといたらいいじゃねえか』と、嬢<sup>かかあ</sup>の気の毒<sup>どく</sup>がるのを叱<sup>しか</sup>りつけようてつた調子なんですからね。……それで、こつちでもだんだん情<sup>なさけ</sup>が通<sup>と</sup>わなくなつて来て、この頃<sup>ころ</sup>じゃ、もう、ちつとも構<sup>かま</sup>いませんです」

「何<sup>なに</sup>だつてね、——その気<sup>き</sup>ちがいつて、ときどき川<sup>かわ</sup>のなかへ飛び込<sup>こ</sup>むんだつてね？」

「へえ、そんな人<sup>ひと</sup>騒<sup>さわ</sup>がせなこともときどきやりますが、あれはどうも少し狂<sup>きやうげん</sup>言<sup>げん</sup>らしいんで……」

「そうなのかい？ ——どうしてまたそんな……」

私はふと口<sup>くち</sup>ごもりながら、あの林<sup>はやし</sup>のなかの空地<sup>くうち</sup>にあつた異<sup>い</sup>様<sup>さま</sup>な

恰好かつこうをした氷こおりぐら倉くらだの、その裏の方でした得えたい体の知れない叫さけ  
 び声だのを思い浮べた。そうしてそれ等らのものを今だにこんなにも異常に私に感じさせている、峠の子供たちの不思議な領分の上を思った。——子供たちよ、よし大人おとなたちにはそういう狂行にせが贗にせものに見えようとも、お前たちは、そんな大人たちには鎖とぎされている、お前たちだけのその領分の中で遊べるだけ遊んでいるがい。

爺やとの話は、私の展開さすべく悩んでいた物語のもう一人の人物の上にも思いがけない光を投げた。それはあの四十年近くもこの村に住んでいるレエノルズ博士が村中の者からずっと憎にくまれ通しであると言うことだった。或ある年の冬、その老医師の自宅が

留守中に火事を起したことや、しかし村の者は誰一人それを消し止めようとはしなかったことや、そのために老医師が二十数年もかかって研究して書いていた論文がすっかり灰燼かいじんに帰したことなどを話した、爺やの話の様子では、どうも村の者が放火したらしくも見える。（何故なぜそんなにその老医師が村の者から憎まれるようになったかは爺やの話だけではよく分からなかったけれど、私もまたそれを執拗しつように尋ねたずようとはしなかった。）——それ以來、老医師はその妻子だけを瑞西スイスイに帰してしまい、そうして今だにどういう気なのか頑固がんこに一人きりで看護婦を相手に暮しているのだった。……私はそんな話をしてゐる爺やの無表情な顔のなかに、嘗かつて彼自身もその老外人に一種の敵意をもっていたらしい

ことが、一つの傷のように残っているのを私は認めた。それは村の者の愚かしさの印しるしであるうか、それともその老外人の頑かたくな氣質のためであろうか？ ……そう言うような話を聞きながら、私は、自分があんなにも愛した彼の病院の裏側の野薔薇のばらの生いきがきのことを何か切ないような気持ちになって思い出していた。

私はヴェランダの床ゆか板いたに腰かけたきり、爺やがまた何処どこからか羊歯を運んで来るまで、さまざまな物思いにふけりながら待っていた。それからまた爺やの羊歯を植えつけるのをしばらく見守っていた。しかし今度は黙ったまままで。そうして私は老人の動かしている無気味に骨ばった手の甲こゝろを目で追っているうちに、ふいと「巨きよじん人の椅子いす」のことを思い浮うかべた。——私は爺やが羊歯を

すつかり植えおえるのを待とうとしないで爺やと別れた。

それから数分後に、私はその巨おおきな岩を目まのあたりに見ることのできる、例の見棄みすてられたウイルスの庭のなかに自分自身を見出みいだした。そのウイルスに昔住むかしんでいた二人の老ろうじょう嬢じょうのことについては爺やも私に何んにも知らせてくれなかった。「ああ、セエモオ  
ルさんですか」と言ったきりだった。何か知っていそうだったがもう忘れてしまったらしかった。そうしてただ不機嫌そうに黙っていた。「そうすると、それを知っているのはお前だけだがなあ……」と私は、いま私の下方に横よこたわっている高原一帯を隔へだてて、私と向い合っている、遥はるか彼方かなたの「巨人の椅子」を、あたかもそのあたりに見えない巨人の姿を探してもいるかのような眼つき

で、まじまじと見まもっていた。

だんだんに日が暮れだした。私のすぐ足許の、いつかその赤い屋根に交尾こうびしている小鳥たちを見出したヴィラは、もう人が住まっているらしく、窓がすっかり開け放たれて、だいたいいろ橙色のカーテンの揺ゆらいでいるのが見えた。ときおり御用聞きがその家のところまで自転車を重そうに押しお上げてくるらしい音が私のところまで聞えて来た。もうそろそろ私もこれまでのようにこの空家の庭でぼんやりしていられそうもないなと思った。そんな気がしだすと、何んだかもうこれが最後の時でもあるかのようにな、私は、私のすべての注意を、半分はこの荒こうはい廃したヴィラそのものに、半分はこの高みから見下ろせる一帯の美しい村、その森、

その花咲ける野、その別荘、それからもう霞みながらよく見えなくなり出した丘々の襞、それだけがまだ黒々と残っている  
 「巨人の椅子」などに傾け出していた。それにも拘わらず、私はときどきややもするとそれ等のものごとくを見失い、そしてまるつきり放心状態になっている自分自身に気がついて、思わずどきつとするのだった。

突然、ちようど私の頭上にある、その周囲だけでもうすつかり薄暗くなっている大きな樅の、ほとんど水平に伸びた枝の一つに、ばたばたとびつくりするような羽音をさせながら、一羽の山鳩が飛んできて止まった。そうしてそんなところに私のいることに向うでも愕いたように、再びすぐその枝から、薄暗いために

一層大きく見えながら、それは飛び去って行った。あたかも私自身イデーの思惟イデーそのものであるかのごとく重々しく羽搏はばたきながら、そしてその翼つばさを無気味に青く光らせながら……。

## 夏

突然、私の窓の面している中庭の、とつくにもう花を失つてい  
る躑躅つづじの茂みしげの向うの、別館べっかんの窓ぎわに、一輪ひまわりの向日葵が咲き  
でもしたかのように、何んだか思いがけないようなものが、まぶ  
しいほど、日にきらきらとかがやき出したように思えた。私はや  
っと其処そこに、黄いろい麦藁帽子むぎわらぼうしをかぶった、背の高い、瘦せぎ  
すな、一人の少女が立っているのだということを認めることが出  
来た。……誰かを待っているらしいその少女は、さつきから中庭  
のあちらこちらに注意深そうな視線をさまよわせていたが、最後

にその視線を、離れの窓から彼女の方をぼんやり見つめていた私の上に置いた。そんな最初の<sup>であい</sup>出会の時には、<sup>たいがい</sup>大概の少女たちは、自分が見つめられていると思う者からわざとそっぽを向いて、自分の方ではその者にまったく無関心であることを示したがるものだが、そんな<sup>しゆううち</sup>羞恥と高慢さとの入り混った視線とは異つて、私の上に置かれているその少女の<sup>そつちよく</sup>率直な、<sup>こうきしん</sup>好奇心でいっぱいのような視線は、私にはまぶしくつてそれから目をそらさずにはいられないほどに感じられたので、私はそのときの彼女——最初に私の目の前に現れたときの彼女に就<sup>つ</sup>いては、そのやや真深にかぶつた黄いろい帽子と、その<sup>つば</sup>鍰のかげにきらきらと光つていた<sup>とくちよう</sup>特徴のある<sup>まな</sup>眼ざしとよりほかには、<sup>ほと</sup>殆んど何も見覚えのない

位であった。……やがて別館から彼女の父らしいものが姿を現した。そしてその二人づれは私の窓の前を斜ななめに横切つて行つたが、見ると、彼女はその父よりも背が高くくらいであった。そしてその父らしいものが彼女にしきりに話しかけるのに、彼女はいかにも気がなさそうに返事をしながら、いつまでも私の方へ躑つづ躑の茂みごしにその特徴のある眼ざしをそそぎつづけていた。……その二人が中庭を立ち去つてしまった跡あとも、私はしばらく、今しがたまでその少女が向日葵ひまわりのように立っていた窓ぎわの方へ、すこし空虚うつろになった眼ざしをやっていたが、ふと気づくと、そこいらへんの感じが、それまでとは何んだかすつかり変つてしまつているのだ。私の知らぬ間に、そこいら一面には、夏らしい匂においが漂ただよい

出しているのだった。……

その日の夕方の、別館の方への私の引越<sup>ひっこ</sup>し、（今まで私の一人<sup>ひとり</sup>で暮らしていた、古い離れ<sup>はな</sup>が修繕<sup>しゅうぜん</sup>され始めるので——）その次ぎの日の、その少女の父の出発、それから他<sup>ほか</sup>にはまだ一人も滞<sup>た</sup>在<sup>いざい</sup>客<sup>きやく</sup>のないそんな別館での、その少女と二人っきりの、背中合わせの暮らし……。

しかし私は毎日のように、ほとんど部屋に閉じこもったきりで、自分の仕事に没頭<sup>ぼつとう</sup>していた。その私の書きつつある「美しい村」という物語は、六月頃からこの村に滞在している私が、そんなまだ季節はずれの、すつからかんとした高原で出会ったことを、それからそれへと書いて行ったものだった。そうして私は丁度いま、

私がそれまで昔の恋こいびと人に対する一種の顧慮こりよから、その物語の裏側から、そして唯ただ、それによつてその淡々たんたんとした物語に或る物悲しい陰影ニユアンスを与えるばかりで満足しようとしていた、この村での数年前の彼女たちとの花やかな交際の思い出、ことにこの村での彼女たちとの最初の歓よろこばしい出会いを、とある日、道ばたに咲き揃そろっている野薔薇のばらの花がまざまざと私のうちに蘇よみがえらせ、それが遂ついに思いがけぬ出口を見つけた地下水のように、その物語の静かな表面に滾々こんこんと湧わきあがってくるところを書き終えたばかりのところだつた。そうしてそういう昔のさまざまな歓あそばしい出会いの追憶ついおくに耽ふけっている暇ひまもなく、すでに私から巢立あなつていったそれらの少女たち、ことにそのうちの一人との気まずい再会を恐

れて、季節に先立ってこの村を立ち去ろうとする、そんな私の悲しい決心を、その物語の結尾として、私はこれから書こうとしているところだった。

私の新しい部屋は、別館の二階の奥おくまったところで、南向きの窓があり、そしてその窓からは数本の大きな桜の幹ごしに向うの小高い水車の道に面しているいくつかのヴィラの裏側がちらちらと見えていた。そしてその窓のすぐ下を、私がそれらの少女たちと初めて出会ったところの、例の抜け道が、小さな坂になりながら、かんぼく灌木のなかに細々と通っているのだった。……私は私のやりかけている仕事から気持をそらすまいとして、私とたった二人きりでその別館の中に暮らさだしているその未知の少女とは、わ

ざと背中を向き合わせてばかりいた。その癖くせ、私は私の窓のすぐ下を通っているその坂道を、毎朝、一定の時刻に、絵具箱をぶらさげながら、その少女が水車の道の方へと昇のぼってゆくの見逃みのがしたことはなかった。丁度、午前中のその時刻の光線の具合ぐあいで、木洩もれ日びがまるで地肌じはだを豹ひょうの皮のように美しくしている、その小さな坂を、ややもすると滑すべりそうな足つきで昇あってゆくその背の低い、痩せぎすな後姿を見送りながら、その上の水車の道に出て、さて、それから彼女はどの小径こみちをどう通って、どんな場所へ絵を描きに行くのだろうかと、そこいらの林のなかの小径が実にややこしく、私自身も初めてこの村へ来た当時は、何度も道に迷ってしまった位ではあったし、それにまたそんなことからして一人の

少女と私との奇妙きみょうな近づきが始まつたりしたので、私は、絵を描く場所を捜さがしながらそんな見知らぬ小径をさまよっているらしい彼女のことを、何となく気づかわしく思っていた。

しかし私は最初のうちはその少女を、唯、そんな風に私の窓からだの、或あるいは廊下ろうかなどでひよつくり擦すれちがいざま、目と目とを合わせないようにして、そつと偷ぬすみ見ていたきりであつた。そんな具合で、私は彼女の顔を、まだ一度も、まともに眺ながめたことがなく、それに私の見たときは、いつも静止していないで、しか

もそれぞれに異つた角度から光線を受けていたせいか、見る度毎たびとに、その顔は変化していた。或る時は、そのやや真深かにかぶつた黄いろい麦藁帽子むぎわらぼうしの下から、その半陰影はんいんえいのなかにそれだけが顔の他の部分と一しよに溶け込ともうとししないで、大きく見ひらかれた眼が、きらきらと輝かがやいていた。またそんな帽子をかぶらずに、庭園の中などで顔いっぱい強い光線を浴びながら、まぶしうにその眼を半分閉とざしているおかげで、平生の特徴を半分失いながら、そしてその代りにその瞬しゆんかん間までちつとも目立たないでいた唇くちびるだけが苺いちごのように鮮あざやかに光りながら、ほとんど前のは別の顔に変わってしまうこともあつた。

そのうちに私たちがやつと短い会話を取り交かわすようになり、

それと共に、しば屢しば、私は彼女の顔をまともから眺めるようになったのにも拘かわらず、彼女の顔がなおも絶えず変化しているのに愕おどろいた。或る時は、その顔はあんまり血色がよく、すべすべしているので、私のためらいがちな視線はいくどもその上で空からすべ滑りをしそうになった。また他の時はすこし疲つかれを帯びたように沈しずんで、不透明ふとうめいで、その皮膚ひふの底の方にはなんだか堇すみれいろ色のようなの漂ひらっているように見えた。そうかと思うと、その皮膚がすっかり透明になり、ぽうつと内側から薔薇色ばらいろを帯びているようなこともあった。ときどき以前に見たのと何処どこか似たような顔をしていることもあった。が、その顔は決して二度と同じものであることはなかった。

或る日のこと、私は自分の「美しい村」のノオトとして悪戯半いたずら分に色鉛筆いろえんぴつでもって丹念たんねんに描いた、その村の手製の地図を、彼女の前に拈ひろげながら、その地図の上に万年筆で、まるで瑞西スイスあたりの田舎いなかにでもありそうな、小さな橋だの、ヴィラだの、落葉から松まつの林だのを印しるしつけながら、彼女のために、私の知っているだけの、絵になりそうな場所を教えた。その時、私のそんな怪あやしげな地図の上に熱心に覗のぞき込んでいる彼女の横顔をしげしげと見ながら、私は一つの黒子ほくろがその耳のつけ根のあたりに浮んでいるのを認めた。その時までちつともそれに気がつかないでいた私には、何んだかそれはいま知らぬ間に私の万年筆からはねたインクの汚し点みかなんかで、拭ふいたらすぐとれてしまいそうに思えたほどだつ

た。

翌日、私は彼女が私の貸した地図を手にして、早速私の教え  
たさまざまな村の道を一とおり見歩いて来たらしいことを知った。  
それほど私の助言を素直すなおに受入れてくれたことは、私に何んとも  
言いようのない喜びを与えた。

そんな村の地図を手にして、彼女かのじよがひとりで散歩がてら見  
つけて来た、或るささやかな溪流けいりゅうのほとりの、蝙蝠傘こうもりがさのよう  
に枝を拵げた、一本の樅もみの木の下に、彼女が画架ががを据すえている間、

私はその画架の傍そばから、数本のアカシアの枝を透しながらくつきりで見えている、程遠ほどくの、真つ白な、小さな橋をはじめで見でもするように入つていた。それは六月の半ば頃ころ、私が峠とうげから一つしよ緒に下りてきた二人の子供たちと別れた、あの印象の深い小さな橋であつた。——私は、彼女がしゃがみながら、パレットへ絵具をなすりつけ出すのを見ると、彼女の仕事を妨さまたげることをおおそえて、其処そこに彼女をひとり残したまま、その溪流に沿うた小径をぶらぶら上流の方へと歩いて行つた。しかし私は絶えず私の背後に残してきた彼女にばかり気をとられていたので、私の行く手の小径の曲り角の向うに、一つの小さな灌木が、まるで私を待ち伏せぶてでもいたように隠かくれていたのに少しも気づかずに、その曲り角

を無雑作むぞうさに曲ろうとした瞬間、私はその灌木の枝に私のジャケットを引っかけて、思わずそこに足を止めた。見ると、それは一本の花を失った野薔薇だった。私はやつとのことで、その鋭い棘するととげから私のジャケットをはずしながら、私はあらためてその花のない野薔薇を眺めだした。それが白い小さな花を一ぱいつけていた頃には、あんなにも私がそれで楽しんでいた癖に、それらの花がひとつ残らず何処かに立ち去ってしまった今は、そんな灌木のあることにすら全然気づこうとしなかった私に対して、それが精一杯せいいつぱいの復讐くしゅうをしようとして、そんな風に私のジャケットを噛み破ったかのようにさえ私には思えた。……そういう花のすつかり無くなつた野薔薇をしばらく前にしながら、私はいつか知らず識しらずに、

それらの白い小さな花のように何処へともなく私から去っていった少女たちのことを思い出していた。……この頃、ともすると、一人の新しい少女のために、そんな昔むかしの少女たちのことを忘れがちであったが、そう言えば、彼女たちがこの村に*おいおい*とやって来る時期ももう間ぢかに迫せまっているのだ。彼女たちが来ないうちに私はこの村をさつと立ち去ってしまった方がいい。そうしなくつちやいけない。——そう自分で自分に言つて聞かせるようにしながら、その一方ではまた、この頃やつと自分の手に這入はいりかけている新しい幸福を、そうあつさりと見棄みすてて行けるだろうかとかと疑つていた。そうして私は自分の気持をそのどちらにも片づけることが出来ずに、自分で自分を持って余しながら、かれこ

れ一時間近くもその山径やまみちをさまよっていた。そうしてその挙句あげく、私がやつと気がついた時には、そんな風に歩きながら自分でも知らずに何度も指で引張っていたものと見えて、私の鼠ねずみいろ色のジヤケツの肩かたのところほころに出来たその小さな綻ほころびは、もう目立つくらいに大きくなっていた。——私はとうとう踵きびすを返して、再び溪流づたいにその山径を下りてきた。そうして私は自分の行く手に、真っ白な、小さな橋と、一本の大きな蝙蝠傘のような樅ひのきの木を認めだすと、私はすこし歩みを緩ゆるめながら、わざと目をつぶった。その木蔭こかげになつて見えざみいだにいるものを、私のすぐ近くに、不意に、思いがけぬもののように見出したのだ。……とうとう私は我慢がまんし切れずに私の目を開けてみた。しかし彼女は私からまだ十

数歩先きのところにいた。そうしてその木蔭にしゃがみながらそれまでパレットを削けずっていたらしい彼女が、その時つと立ち上つて、私にはすこしも気がつかないように、描きかけのキャンバスを画架からとりはずすと、それを道ばたの草の上へいかにも投げやりりに、乱暴なくらいにほうり出したところだった。ほうり出された大きなキャンバスは、しかしひとりでにふんわりとなりながら、草の上へ倒たおれて行った。それを見ると、私は彼女のそばへ駈かけつけた。

「僕が持っていて上げよう」

「いいわ……いつもひとりでするんですから」

「意地わる！」

「意地わるでしよう」

私は彼女とそんな風に子供らしく言い合いながら、無理にカンバスを引つたくと、それを自分の肩にあてがいながら、彼女と並んで村の街道かいどうを宿屋の方へと歩いて行った。ときおり私たちならは散歩をしている西洋人や村の子供たちとすれちがった。彼等かれらのものめず珍らしそうな視線は私たちを——殊ことにまだこの村に慣れない彼女を気づまりにさせているらしかった。私は私で、そういう彼女をつとめて気軽にさせようと思って、私の空いている方の手を自分の肩の上へやりながら、

「ほら、こんな穴が出来ちやった……さつき一人で散歩しているとき野薔薇のばらにひっかかったのさ」

そう言つて、その肩の穴がもつと大きくなるのも構わずに、それをよく彼女に見せようとして、自分のジャケットを引張つて見せたりした。そうして私はこんなにまで私と打ち解け合ひだしているこの少女を振り棄てて、自分ひとりこの村を立ち去るなんぞと  
いうことは、到底出来そうもないと考え出していた。

私の「美しい村」は予定よりだいぶ遅れて、或る日のこと、漸つと脱稿した。すでに七月も半ばを過ぎていた。そうして私はそれを書き上げ次第、この村から出発するつもりであつたのに、

私はなおも、そういう一人の少女のために、一日一日と私の出発を延ばしながら、私とその物語の背景に使った、季節前の、気味悪いくらいにひっそりした高原の村が、次第次第に夏の季節シーズンにはいり、それと同時にこの村にもぼつぼつと避暑客ひしよきやくたちが這入り込んでくるのを、私は何んだか胸をしめつけられるような気持で、目のあたりまに迎むかえていた。

私はしばしばその少女と連れ立って、夕食後など、宿の裏の、西洋人の別荘べっそうの多い水車の道のあたりを散歩するようになっていた。そんな散歩中、ときおり、一月ひとつき前までは私と一しよに遊び戯たわむれたりしたことさえある村の子供たちと出会うであようなこともあったが、彼等は私たちの傍を素知らぬ顔をして通り抜ぬけていつ

た。もう私を覚えていないのだろうか、それとも私がそんな見知らない少女と二人づれなのを異様に思つてそうするのだろうか？

……しかしそれらの子供たちも、そのうちだんだんに、そんな林の中で最初のうちは私たちのよく見かけたものだった、さまざまな小鳥などと共に、その姿をほとんど見せないようになった。

そしてその代り、私たちとすれちがいながら、私たちに好奇的な眼まなざしを投げてゆく、散歩中の人々や、自転車に乗った人々などがだんだんに増えて来た。それらの中には私と顔見知りの人たちなども雑まじっていた。私はいつかこんなところをひよつくり昔の女友達にでも出会いはしないかと一人で気を揉もんでいたが、ときどき、そんな散歩の途とちゆう中に、ふと向うからやってくる人々のうち

に遠見がどこかそれらに似たような人があつたりすると、私は慌あわてて、その人たちを避さけるために、道もないような草の茂しげみのなかへ彼女を引つ張りこんで、何んにも知らない彼女を駭おどろかせるよ  
うなこともあつた。

そんな風に、私は彼女と暮方近い林のなかを歩きながら、まだ私が彼女を知らなかつた頃、一人でそこいらをあてもなく散歩を  
していたときは、あんなにも私の愛していた瑞西式スイスのバンガロオ  
だの、美しい灌かんぼく木だの、羊齒しだだのを、彼女に指して見せながら、  
私はなんだか不思議な気がした。それ等のものが今ではもう私に  
は魅みりよく力もなんにも無くなつてしまつていたからだ。そうして私  
は彼女の手前、それ等のものを今でも愛しているように見せかけ

るのに一種の努力をさえしななければならなかった。それほど、私自身は私のそばにいる彼女のことで一ぱいになってしまっているのだった。……そうしてそんな薄ぐらい道ばたなどで、私は私の方に身を寄せかけてそれ等のものをよく見ようとしている彼女のしなやかな肩へじつと目を注ぎながら、そつとその肩へ私の手をかけても彼女はそれを決して拒みはしないだろうと思つた。そして私は或る時などは、その肩へさりげないように私の手をかけようととして、彼女の方へ私の上半身を傾けかけた。私の心臓は急にどきどきしだした。が、それよりももつとはげしく彼女の心臓が鼓動しているのを、その瞬間、私は耳にした。そしてそれが私に、そういう愛撫を、ほんのそのデッサンだけで終らせた。……私は

まだその本物を知らないのだけれど、それが与えるのとちつとも  
 異なるちがような特ユニイク異な快さを、そのデッサンだけでも充じゆうぶ  
 分んに味あじわったように思いながら。

一体、「水車の道」というのは、郵便局やいろんな食料品店な  
 どのある本通りの南側を、それと殆ほとんど平行しながら通っている  
 のだが、それらの二つの平行線を斜はすかに切っている、いくつか  
 の狭せまい横町があった。そんな横町の一つに、その村で有名な二軒けん  
 の花屋があった。二軒とも藁わら屋根やねの小さな家だったが、共に、そ

の家の五六倍ぐらゐはあるような、大きな立派な花畑に取り囲まれていた。そしてその二つの花畑を区切つて、いつも氣持のよいせせらぎの音を立てながら流れているのは、数年前まで、そのずつと上流のところでごとごとと古い水車を廻かいてん転させていたところの、あの小さな流れであつた。そしてその一方の花畑などは、水車の道を越こして、更さらにその道の向うまで氾はん濫らんしていた。：

：つい先頃までは、あんなに何処どこもかしこも花だらけであつたこの村では、この二軒の花屋は、ほとんどその存在さえ人々から忘れられていた位であつたが、やがてその季節が過ぎ、それらの野生の花がすっかり散つて、それと入れ代りに今度は、これらの畑で人工的に育て上げられた、さまざまな珍しい花が、一どにど

つと咲き出したものだから、その横町を通り抜ける者は誰しもその美しい花畑ひとみに眸ひとみをみはらないものは無いくらいであつた。だが、その二軒並んだ花屋の前を通りすぎりに、注意をしてそれらの店の奥おくに坐すわつてゐる花屋の主人たちに目を止めた者は、一層の愕おどろきのためその眸をもつと大きくせずにはいられなかつたであらう。と言うのは、その一方の店の奥にきよとんと坐つてゐる白い碁ごばん盤じま縞しまのシャツを着た小柄こがらな老人を認めたのち、次の花屋の前にさしかかると、何んとその奥にも、つい今しがたもう一方の奥に見かけたばかりのと寸分ちがも異ちがわな、小柄な老人が、やはり同じような白い碁盤縞のシャツを着て、きよとんと腰こしをかけ、往來の方を眺めてゐるのに気づくだらうからだ。ただ異うのは、そんな

二人のそばに坐っているのが、一方はいつも髪かみの毛をくしやくしやにさせた、肥ふとつちよの女にようぼう房であつたし、もう一方はそれと好対照をしている位に瘦やせつぽちの、すこし藪やぶ睨にらみらしい女房であることだ。つまり、その二軒の花屋の老いたる主人たちは、ほとんど瓜うり二つと云いつていいほどの、兄弟なのであつた。その上、可笑おかしいことには、この花屋の兄弟はとても仲が悪くて、夏場だおけはお互たがいに仲好なかよさそうに口を利きき合あひながら商売しょうらいをしているが、さて夏場が過ぎてしまうと、すぐに性しょうこ懲ちやうりもなく喧嘩けんかをし始め、冬の間などは、お互たがいに一言も口を利きかずに過あごすようなことさえあると言うことだつた。——そんな風変りな二軒の花屋のある横町には、道ばたに数本の小さな樅もみと楓かえでとが植うえられてあつたが、

その一番手前の小さな楓の木に、ついこの間のこと、「売物モミ二本、カエデ三本」という真新しい木札きくだがぶらさげられた。そしていまや、その横町の両側の花畑には、向日葵ひまわりだの、ダリヤだの、その他さまざまの珍しい花が真つきかりであった。……

私はそんな二軒の花屋の物語を彼女に聞かせながら、その私の大好きな横町へ、彼女の注意を向けさせた。

水車の道の上へ大きな枝をひろ拵ひらげている、一本の古い桜さくらの木の根元から、その道から一段低くなっている花畑の向うに、店の名前を羅馬字ロオマじで真白にくり抜いた、空色の看板が、さまざまな紅だの黄だの花とすれすれの高さに、しかしそれだけくつきりとう浮ういて見えている。——そんな角度から見た一軒けんの花屋の屋根とその

花畑を、彼女は或る日から五十号のキャンバスに描き出した……。えが

しかしその水車の道はそのへんの別荘の人たちが割合に往き来するので、彼女のまわりにはすぐ人だかりがして困るらしかったが、私は一遍もその絵を描いている場所へ近づこうとはしないでいた。そんな人目につき易い場所やすで私が彼女と親しそうにしているのを、私の顔見知りの人々に見られなくなかったからだ。で、私は自分の部屋に閉じこもったきりで、この頃やっと書き上げたばかりの原稿へ最後の手入れをし続けていた。（しかし、その間一番余計に私の考えていたのは、やっぱり彼女のことであった。）——が、私はその花屋を描いているところを遠くからなりと、一度見て置きたいと思って、或る朝、宿屋の裏の坂を上りながら水

車の道まで出て行って見た。そうして私は、その道の向うの、大きな桜の木の下に立って、パレットを動かしている彼女と、それから彼女の横からその画布を覗き込みながら、一人のベレ帽をかぶった若い男が、何やら彼女に話しかけているのを認めた。私はそんな男が早く彼女のそばを立ち去ってくれればいと、すこしやきもきしながら、待っていた。――

「誰れ？　いまの人……」やつとその男が立ち去つたのを見ると、私は急いで彼女の方へ近づいて行きながら、いかにも何気なさそうに訊いた。

「画家さんなんですって……何んだか、あんまり何時までも見ていらつしやるんで、私、厭になつちやつた……」

彼女はわざとらしく顔をしかめて見せた。それからすこし恐いこわような眼つきをして花畑の一部を見つめだした。熱心に絵を描こうとしているときの彼女が、こんな男のような、きびしい眼つきになるのを私はよく知っていたものだから、私はそれつきり黙っだまていた……。

そんな風に、私がちよつとでも彼女から離れてはないる間に、私なしに、彼女がこの村で一人きりで知り出しているすべてのものが、私に漠ぼくとして不安を与えるあたのだった。或る日、彼女は、昔は其処そこに水車場があったと私の教えた場所のほとりで、屢しばしば、背中から花籠はなかごを下ろして、松葉杖まつばづえに靠もたれたまま汗あせを拭ふいている、跛ちんぱの花売りを見かけることを私に話した。彼女の話すようなものを

ついぞ見かけたことのない私には、そんな跛の花売りのようなものと彼女が屢しば出会うことすら、自分でも可笑おかしいくらい、氣になつてならなかつた。

或る朝、私は私の窓から彼女が絵具箱をぶらさげて、裏の坂のぼを昇つてゆくのを見送つた後、そのまんまぼんやり窓にもたれてみると、しばらくしてからその同じ坂を、花籠を背負い、小さな帽子をかぶつた男が、ぴよこんぴよこんと跳はねるような恰かっこう好をして昇つてゆくのが認められた。よく見ると、その男は松葉杖をつ

いているのだ。ああ、こいつだな、彼女がモデルにして描きたい  
と言つていた跛の花売りというのは！ ……そういう後姿だけで  
はよくわからなかったが、その男は、この村の花売り共が大概  
よぼよぼの老人ばかりなのに、まだうら若い男らしかつた。それ  
が一層片輪の故にそんな花売りなんかしていることを物哀れに  
感じさせた。——そうして、その悲しげな跛の花売りを、私は自  
分自身の眼で見知るや否や、彼女がその姿を絵に描いてみたいと  
言つていただけでもつて、その跛の花売りに私の抱いていた、軽  
い嫉妬しつとのようなものは、跡方あとかたもなく消え去つた。……

しかし、数日前水車の道で彼女に親しげに話しかけていたところを私の目撃もくげきした、あの画家だという、ベレ帽をかぶっていた

青年は、その顔なんか明めいりよう瞭りようには覚えていなかったが、それだけ一層、その男の漠とした存在は、何かしら私を不安にさせずにはおかなかつた。彼女はその画家のことはそれつきり何んにも私に話さなかつたが、ひよつとしたら彼女はそれまでに何遍もその画家に出会つており、そして私の知らない間に互に親しくなりだしているのではないかと云うような懸念けねんさえ私は持ちはじめた。そうして或る日のこと、そういう私の懸念を一そう増させずにはおかないような出会いを私たちはその画家としたのだつた。

—— やつと彼女が花屋の絵を描き上げたので、次の絵を描く場所を捜さがすために、或る晴れた朝、私は彼女と一いっしょ緒しょに、すこし遠いけれど、サナトリウムの方へひさしぶりで出かけてみることにし

た。私たちが、小さな集りのあるらしい、少人数の西洋人の姿が窓ごしにちらちら見える、教会の前を通りぬけて、その裏の、いっつも人気ひとけのない橡とちの林の中へはいろいろとした途端とたん、私たちの行く手の、その林のなかの小径こみちをば、一人ひとりの男が、帽子もかぶらずに、スケッチ・ブックらしいものを手にしながら、ぶらぶらしているのを私たちは認めた。「いつかの画家さんよ……又また、お会いしたわ」——彼女かのじよにそう注意をされるまでは、私はその男が、この頃何ごろの理由もなく私を苦しめ出している、そのベレ帽の画家と同じ男であることには気づかなかった位であった。それほど私はその画家については何人にも見覚えがなかったのだ。私は、私たちの方へぶらぶら歩いてくるその男からは、つとめて私の視線をは

ずしながら、急に早口にとりとめもないことを彼女に話し出した。私は彼女が私の話の話をとられてその男の方へはあんまり注意しないようにと仕掛けたのだ。しかし彼女は私の言うことには何んだか気がなさそうに応えるだけであつた。そして彼女は、私がそばにいたのでひどく曖昧にされたような好意に充ちた眼ざしで、その男の方を見つめていた。少くとも私にはそんな気がした。すると、その男の方でも、私の知らないこの前の出会いの際に、彼女と交換した親しげな視線の続きとでも言つたような意味ありげな視線を彼女の方へ投げかけながら、そして思い出し笑いのようなものをふいと浮べながら、軽く会釈をして、私たちのそばを通り抜けて行つた。

私はなんだか急に考えごとでもし出したかのように黙り込んだ。私たちはその橡とちの林を通り抜けて、いつか小さな美しい流れに沿って出していた。しかし私はいま自分の感じていることが何処どこまで真実であるのか、そんなことはみんな根も葉もないことなんじゃないかと疑ったりしながら、気むずかしそうに沈黙ちんもくしたまま、自分の足あしもと許ばかり見て歩いていった。そうして私は、そんな自分の疑いに対するはつきりした答えを恐おそれるかのように、いつまでも彼女の方を見ようとはしないでいた。が、とうとう私は我慢がまんし切れなくなつてそんな沈黙の中からそつと彼女の横顔を見上げた。そして私は思ったよりもつと彼女がその沈黙に苦しんでいるらしいのを見抜いた。そういう彼女の打ち萎しおれたような様子は私に

はたまらないほどいじらしく見えた。突然、後悔のようなもので私の胸は一ぱいになった。……私がほとんど夢中で彼女の腕をつかまえたのは、そんなこんがらがった気持の中でだった。彼女はちよつと私に抵抗しかけたが、とうとうその腕を私の腕のなかに切なそうに任せた。……それから数分経ってから初めて、私はやつと自分の腕の中に彼女がいることに気がついたように、何んともかんとも言えない歓ばしさを感じ出した。

私たちは、少しぎごちなさそうに腕を組んだまま、例の小さな木橋を渡った。それからその流れの反対の側に沿って、サナトリウムへの道に這入って行った。その途中にずっと続いている野薔薇の生牆は、既にその白い小さな花をことごとく失った跡だつ

た。そんな葉ばかりになってしまっている野薔薇の茂みは、それらが花を一ぱいつけていた頃のことを、殆んど強制的に私に思い出させはしたけれど、私はそれがどんなになっていようとも、もうそれには少しも感動できなくなっていた。それほどあの頃からすべてが變つていた。そしてそれが何もかも自分の責任のような気がされて、私はふつと気が鬱ふさいだ。……が、それらの生墻の間からサナトリウムの赤い建物が見えだすと、私は気を取り直して、黄いろいフランス菊ぎくがいまを盛りさかりに咲きみだれている中庭のずつと向うにある、その日光室サン・ルウムを彼女に指して見せた。丁度、その日光室の中には快癒期かいゆきの患者かんじやらしい外国人が一人、籐椅子とういすに靠もたれていたが、それがひよいと上半身を起して、私たちの方をもの

憂げな眼まなざしで眺め出した。——それから私たちは、なおもその流れに沿って、そこいらへんから次第にアカシアの木立ふちに縁ふちどられだす川沿いの道を、何処までも真直に進んで行つた。それらのアカシアの花あしざわざかりだつた頃は、その道はあんなにも足触りが軟やわらかで、新しんせん鮮な感じがしていたのに、今はもう、あちこちに凸で凹こぼこができ、汚きたならしくなり、何んだかいやな臭においさえしていた。その上、それらのアカシアの木立は、まだみんな小さいので、はげしい日光から私たちを充じゅうぶん分に庇かばうことが出来ないのです、その川沿いの道はそれまでの道よりも一層暑いように思えた。私たちは途中からそれらのアカシアの間をくぐり抜けて、丁度サナトリウムの裏手にあたる、一面に葦よしの這よっている、いくぶん荒こうりよい。

涼とした感じのする大きな空地へ出た。其処からは、村の峠が、そのまわりの数箇の小山に囲繞されながら、私たちの殆んど真向うに聳えていた。——梅雨期には、その頃の私自身の心の状態のせいだったかも知れないが、その奥には何かしら神秘的なものがあるように思えてならなかった。その峠も、いまは何物をも燃やさずにはおかないような夏の光線を全身に浴びながら、何んだか炎のよう<sup>ほのお</sup>にゆらめいているような感じで、私たちに迫<sup>せま</sup>っていた。……

彼女は、その燃ゆるような山なみを、サナトリウムの赤い屋根を前景に配置しながら、描いてみたいと言った。そしてそれを適当な角度から描くために、そんなはげしい光線の直射するのにも

無頓著むとんじやくのように、その空地のやや小高いところを選ぶと、三さんき脚やくだい台すを据えて、その上へ腰かけ、斜ななめにかぶった運動帽の下からときどきまぶしそうな顔を持ち上げながら、その下図をとりだした。……私は彼女の仕事の邪魔じやまにならないように、いつものように彼女を其処に一人きり残しながら、再びさっきの土手に出て、やや大きなアカシアの木蔭こかげを選んで、そこに腰を下ろしていた。そうして私の前の小さな流れの縁を一羽の鶴せきれい鴿さびが寂しそうにあちこち飛び歩いているのにぼんやり見入っていると、突然、私の背後のサナトリウムの方からその土手をうんうん言いながら重たそうに荷車を引いてくる者があるので、私は道をあげようとして立ち上った。見ると、それは一台の塵芥車ごみぐるまだった。私

は、とんでもないものがこんなところを通るんだなあと思ひながら、道ばたの灌木かんぼくの中へすつぽりと身体からだを入れながら、よそつぽを向いていた。が、その塵芥車がやつと私の背後を通り過ぎたらしいので何気なくなにげちらりとそれへ目をやると、その箱車のなかには、罐詰かんづめの罐やら、唐とうもろこしの皮やら、英字新聞の黄ばんだのやら、草花の枯かれたのやらが、一種汚らしい美しさで、ぎつしりと詰つまっていた。そしてその車の通った跡には、いつまでも腐くさった果物に似た匂においが漂ただよっていた。……私はこんな塵芥車のよくなものにも、いかにもこの外国人の多い村らしい独特な美しさのあるのを面白おもしろがって、それをちよつと見送った後、再びさつきのアカシアの木蔭へぼんやり腰を下ろしていると、ものの数分

と経たないうちに、私はまたしても私の背後へ近づいてくる車の音でもって、立ち上らなければならなかった。それもまた、前のとそっくり同じような、塵芥車だった。そしてそれから小一時間ばかりの間に、私はこの土手を通りすぎる同じような塵芥車を、ほとんど十台ぐらい数えることが出来た。——何処かこの先きの方にでも、きつとこの村の芥棄ごみすて場があるんだなど、それにはじめて気がつくや否いなや、私は漸やつとこのことで、このサナトリウムの土手がこんなに凸凹になり、汚らしくなっている原因にも気がつきだした。そうしてそれとほとんど一緒に、もうこんなにこの村には沢たくさん山の外国人がはいり込んでいるのかなあと思いながら、私はすこし呆気あっけにとられたように、いまして私の背後を通り過

ぎて行ったばかりの、その最後の塵芥車ごみぐるまをいつまでも見送って  
いた。……

## 暗い道

「どっちへ向いて行くんだか、私にはちつとも分らないわ」彼女は  
はいくらか上<sup>うわ</sup>ずったような声で言った。

「実は僕にも分らなくなっちゃったのさ……」私はそう返事をし  
ながら、彼女の方を見やったが、その白い顔の輪<sup>りんかく</sup>廓がもうほと  
んど見分けられないくらいの暗さになりだしていた。実際私自身  
にもこんな風に私たちの歩いて<sup>やまみち</sup>いる山径の見当がちよつと付き  
かねていたのだけれど、私はわざとそれを冗<sup>じょうだん</sup>談のように言い  
紛<sup>まぎ</sup>らわせていたのだった。

——その日、私が私の「美しい村」の物語の中に描いた、二人の老嬢ろうじょうたちのもと住まっていた、あの見棄みすてられた、古いヴイラの話を彼女にして聞かせると、それをしきりに見たがったので、私自身はもうそんなものは見たくもなかったのだけれど、その荒あれ果てたヴェランダから夕暮ゆうぐれの眺めがいかに美しくかったのを思い出して、夕食後、ともかくもそのヴイラまで登って行ってみることにした。恐らくあの家はまだあのまんまになっているだろうと予想しながら。……が、だんだんそのヴイラが近づいてくるにつれ、私は何んだか急にそんな自分の夢ゆめの残骸ざんがいのようなものを見に行くのが厭いやな気がし出したので、そろそろ日が暮れかけて来たのをいい口実に、まだ山径がこれからなかなか大へんだ

からと言つて、私たちはその途中から引つ返すことにした。——  
その帰り途、<sup>みち</sup>私はその代りに、まだ彼女が知らないというベルヴ  
エデエルの丘の<sup>おか</sup>方へ彼女を案内するため、いましがた登つてきた  
のとは異つた<sup>ちが</sup>山径を選んでゐるうちに、どう道を<sup>まちが</sup>間違えたのか、  
そのへんからもう下り道になつてもよさそうな時分なのに、いつ  
までもそれが爪<sup>つま</sup>先き上りになつていて、私たちはその村の中心か  
らはますます反対の方へ向いつつあるような気がしてきた。まだ  
この村にこんな私の知らない部分があることを心のうちでは驚<sup>おどろ</sup>き  
ながら、しかし私はそのへんをいかにも知り抜<sup>ぬ</sup>いてゐるように装<sup>よそお</sup>  
いながら、さつさと彼女を導いて行つた。が、私たちはともする  
と無言になるのだつた。……いつのまにやらもうすつかり日が暮

れていた。私たちの歩いている道の両側の落葉松からまつなどが伸び切つて、すこし立て込んでいたりすると、私はほとんど彼女の着ているワンピースの薔薇色ばらいろさえ見さだめがたい位であった。ただときどき彼女の肩かたが私の肩にぶつかるので、自分の傍そばに彼女を近ぢかと感じながら歩いていた。そうかと思うと、木立の間からだしぬけにその奥おくにあるヴィラの灯あかりが下枝したえごしに私たちの肩に落ちて来て、知らず識しらずに身をすり寄せていた私たちを思わず離れさせた。——そんなヴィラの数がだんだん増え出して来たらしいことが、いくらか私たちをほつとさせていた。……

突然、私は心臓をしめつけられたように立ち止まった。私はそれらのヴィラに見覚えがあり出すのと同時に、これをこのまま行

けば、私がこの日頃そこに近寄るのを努めて避けるようにしていた、私の昔の女友達の別荘の前を通らなければならぬことを認めたのだ。そして私は、その一家のものが二三日前からこの村に来て、宿の爺やから聞いて知っていたのだ。しかもうさんざん彼女を引つ張りまわした挙句だったし、私もかなり歩き疲れていたのです、この上廻り道をする気にはなれずに、私は心ならずもその別荘の前を通り抜けて行くことにした。……だんだんその別荘が近づいて来るにつれ、私はますます心臓をしめつけられるような息苦しさを覚えたが、さて、いよいよその別荘の真白な柵が私たちの前に現われた瞬間には、その柵の中の灯りの一ぱいに落ちてゐる芝生の向うに、すっかり開け放した窓

柵くの中から、私の見覚えのある古い円卓まるテエブル子の一部が見え、その上には、人々が食事から立ち去ってからまだ間もないと言ったように、丸められたナプキンだの、果物の皮の残っている皿さらだの、珈琲コオヒイチャわん茶碗わんだのが、まだ片づけられずに散らかったまま、まぶしいくらい洋燈ランプの光りを浴びてきらきらと光っているのを、私は自分でも意外なくらいな冷静さをもつて認めることが出来た。いい具合ぐあいに其処そこには誰も居だれ合わさなかつたせいか、それともまたそれは、その瞬間までに、私のなかの不安が、既にその絶頂を通り越こしてしまっていたせいであつたらうか？　ともかくも、私はかなり平静に近い気持で、ただちよつと足を早めたきりで、その白い柵の前を通り過ぎることが出来た。……そんな私の心のなかの

動揺どうようには気づはこう筈はずがなく、彼女は急に早足はやあしになった私のあとから、何んだか怪訝けげんそうについて来ながら、

「まだ、なかなか？」とすこし不安らしく私に声をかけた。

「うん……ますます見当がつかないんだ」

「そんなことばかり言つて……」彼女はそんな私の本気とも冗談ともつかないような態度にとうとう腹を立てたように見える。そうしてそんな私を非難するような口くちぶり吻くちぶりで、

「早く帰らない？」と言つた。

「じゃ、一人でお帰りなさい」と私はいまはもう微笑びしょうらしいものさへ浮うかべながら返事をした。

「意地わる！」

「だって、ほら、其処知っているでしょう？」と私は、私たちの行く手の暗がりの中に小さなせせらぎが音立てているのを指しながら、「水車の道じゃないの？」と快活そうに言った。「まあ、本当に……」と彼女はまだ何んだかそれが信じられないと言った風に自分の周囲を見廻わしていた。私たちはすでに、林のなかを抜け出して、昔、水車場のあつた跡に佇たずんでいたのだつた。――そこで道が二ふた股またに分かれて、一方は「水車の道」、もう一方は「本通り」へと通じていた。どっちからでも、もうすぐ其処の宿屋へは帰れるのだが、水車の道の方からだと例のかなり峻げしい坂道を下りなければならなかつたので、私たちは本通りの方から帰ることにした。で、その後者の道をとって、その突きあたりか

ら本通りの方へ曲ろうとした途端とたんに、私は、その本通りの入口の、ちようど宿屋の前あたりから、ぽうつと薄明うすあかるくなりだしている。圏わの中に、五六人、一かたまりになった人影ひとかげがこちらを向いて歩いてくるのを認めた。私はどきつとして立ち止まった。どうやらそれが私の昔の女友達でもらしく見えたからだ。……私は急に、私のそばにいる彼女の腕をとつて、向うから苦手の人が来るらしいので捕つかまると面倒めんどうくさいからと早口に言い訳わけしながら、いま来たばかりの水車場の方へ引つ返していった。そうして再びさっきの小川の縁ふちに並ならんで立ちながら、その人達がそのまま本通りの方から来るか、それとも宿屋の裏の坂を抜けてくるか、どつちから来るだろうと、両方の道へ注意を配っていた。……そしてそつ

ちにばかり注意を奪うばわれていたので、私たちは、私たちの背後の、  
いましがた其処から私たちの出てきたばかりの林の中から、数人  
のものが懐かいちゆうでんき中電気を照らしながら、出てくるのには全然気が  
つかずにいた。突とつぜん然私たちはその懐中電気のまぶしい光りを浴  
びせられた。私たちはびっくりしてその小川の縁を離はなれた。……  
しかし懐中電気を手にしていた男の方でも、そんなところに思い  
がけず私たちが突つ立っていたのに、面めんくら喰くったらしかつたが、  
その一人が私だと気がつくつと、

「××君じゃない？」と私の名前をためらいがちに言った。そう  
言われて、私が一層驚いて、まぶしそうに顔をしかめながら振ふり  
向いて見ると、それは私の学生時代からの友人であった。それと

同時に、私はその友人の背後に、若い女たちが二三人、まだ不審ふしんそうに闇やみを透すかしながらこちらを見つめているのに気がついた。

それはその友人の若い妻君や妹たちであつた。私は彼女たちにちよいと会えしやく釈やくをして、それから気まり悪そうに微笑しながら、

「なあんだ、君たちか！——何時いつ、こつちへ来たの？」

「昨日来た。さつき君のところへ寄つたら留守だと言うんで、それから細木さんのところへ行つて見たんだ。あそこの家もみんなではら出で払はらっているんだ……」

私はその友人の言葉を聞き終えるか終えないうちに、本通りの方の曲り角から一かたまりの人影がこつちへ曲つて来だしたのを認めた。

「じゃあ、構わないから、僕ぼくのところへ寄つて行けよ」

そう言い棄てて、私はさつさと一人で水車の道の方へ歩き出した。そうして私は二三のヴィラの前を通り過ぎてから、その先きの、真つ暗だけれど、私には勝手の知れた、草ぶかい坂道をずんずん一人先きに降りていった。やがて他ほかの連中も、そんな私の後から一ひと塊かたりになつて、一箇この懐中電氣を頼たよりにしながら、きやつきやつと言つて降りて来た。……

「まあ、こんな道あるの、私、ちつとも知らなかつたわ」

坂の途中で、友人の若い妻君がそんなことを誰にともなく言つたらしいのが、もうその時はその小さな坂を降り切つてしまつていた私のところまで、手にとるように聞えて来た。私は丁度、そ

の友人の妻君も確か数年前にその坂道で私の出会った少女たちの中に雑まじっていたことを思い出すともなく思い出していたところだった。——その出会いは私にはあんなにも印象深いのに、嘗かつてその少女たちの一人であつた彼女かのじよの方では、（恐おそらく他の少女たちも同様に）そんな私との出会いのことなどは少しも気に留めていないで、すっかり忘れてしまつているのかなあと思つた。が、一方ではまた何んだか、そんなことを言つて彼女が私をからかつているのじゃないかしら、とそんな気もされた。ひよいと彼女の口を衝ついて出たらしいそんな言葉を私はひとりで気にしながら、いつまでもそつぽを向いて皆の降りてくるのを待つっていると、突然、そのうちの誰かが足を滑すべらして、「あつ！」と小さく叫さけん

で、坂の中途にどさりと倒れたらしい気配がした。見上げると、その坂の中途にまだ転ころがっているらしいものがまるで花ざかりの灌かんぼく木のように見えた。そして他のものがみんな立ち止まって、その一番最後に降りてきた少女の方をふり返っているのを、私はただぼかんとして眺ながめながら、その場を一步も動こうとしないで突っ立っていた。そうして私は毎朝のようにこの坂を昇のぼり降りしているあの跛ちんばの花売りのことをひよつくり思い浮べ、あいつはまた何だつてこんなあぶなつかしい坂道をわざわざ選んで通るのだろうかしらと、全然いまの場合とは何んの関係もないようなことを考え出していた。……



# 青空文庫情報

底本：「風立ちぬ・美しい村」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年1月25日発行

1987（昭和62）年5月20日89刷改版

1987（昭和62）年9月10日90刷

初出：序曲「大阪朝日新聞」（「山からの手紙」の表題で。）

1933（昭和8）年6月25日

美しい村「改造」

1933（昭和8）年10月号

夏「文藝春秋」

1933 (昭和8) 年10月号

暗い道「週刊朝日 第25巻第13号」

1934 (昭和9) 年3月18日号

初収単行本：「美しい村」野田書房

1934 (昭和9) 年4月20日

※「二股《ふたまた》」と「二又《ふたまた》」の混在は、底本通りです。

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977 (昭和52) 年5月28日、解題によろ。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

2014年8月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 美しい村

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>